

自殺の実証的研究 (Ⅱ)

岡 崎 文 規

目 次

- I 序 言
- II 自殺率の推移傾向
- III 自殺率の地域的差異 以上前号所載
- IV 自殺率の男女別
- V 自殺率の年齢別 本号所載

IV 自殺率の男女別

1. 自殺性比

ケトレーは、「人間について」のなかで、フェルレー (Falret) の自殺に関する研究を引用して、「自殺は、両性のあいだで、いちじるしい対立をなしている。それで、男性の場合には、自殺の最も多いのは4月であるが、女性の場合には、4月の自殺は第5位であつて、8月の自殺は、男性の4月の自殺のように最高である」¹⁾と書き伝えている。しかし、フェルレーのこの研究は、自殺の季節的差異を男女について観察したものであつて、自殺性比そのものを問題にしたのではない。

自殺性比を統計的に取扱つた最初の学者の一人はおそらくワグナーであらう。すなわち彼は、「男子の自殺数は、一般に女子の自殺数にくらべて、3ないし4倍も多く、女子の自殺100にたいして男子の自殺は、プロシアでは417、フランスでは322、デンマークでは380である」²⁾といつている。

男子の自殺数は女子の自殺数をいちじるしく超過している事実をワグナーがはじめて統計的に確証したわけであつて、モルセリーは、さらにこの事実を豊富な統計にもとづいて、追証した。すなわち彼の結論は、「たいていの国では、自殺数は、男子3ないし4にたいして女子1である」³⁾といふのであるが、この結論を裏づけるために使用した統計はつぎのようである。(モルセリーのこの著書は、日本では稀徧書に属し、簡単に閲読する機会が少なからうと考えるるので、ここに引用しておこう)

- 1) Quetelet, A., Sur l'Homme, Tome II. 1835. p. 158.
- 2) Wagner, A., Die Gesetzmässigkeit in den scheinbar willkürlichen menschlichen Handlungen. 1864. S. 23.
- 3) Morselli, H., Suicide, 3rd ed. 1899. p. 189.

西欧諸国における自殺の男女割合

国名	調査年次	自殺の絶対数			男女自殺の百分比		女子自殺1000 にたいする男 子自殺数	
		男子	女子	合計	男子	女子		
スエーデン	1831—40	1,509	372	1,881	80.2	19.8	4,055	
	1841—50	1,750	454	2,204	79.4	20.6	3,854	
	1851—55	1,015	252	1,267	80.1	19.9	4,027	
	1856—60	(801)	(253)	1,054	76.0	24.0	3,167	
	1861—69	(2,287)	(623)	2,910	78.6	21.4	3,673	
ノールウエー	1870—74	(1,045)	(316)	1,361	76.8	23.2	3,310	
	1856—60	549	176	725	75.7	24.3	3,115	
	1861—65	543	160	703	77.2	22.8	3,386	
デンマーク	1866—73	800	247	1,047	76.4	23.6	3,237	
	1845—56	3,324	1,106	4,430	75.0	25.0	3,000	
	1864—69	2,099	635	2,734	76.7	23.3	3,292	
ロシア	1870—76	2,485	748	3,233	76.9	23.1	3,329	
	1875	1,408	363	1,771	79.5	20.5	3,878	
イギリス	1858—60	(2,780)	(1,092)	(3,872)	71.8	28.2	2,546	
	1863—67	4,905	1,791	6,696	73.3	26.7	2,745	
	1868—71	4,559	1,586	6,145	74.2	25.8	2,876	
	1872—76	5,924	2,071	7,995	74.1	25.9	2,861	
オランダ	1869—71—72	325	62	387	84.0	16.0	5,250	
	ベルギー	1836—39	558	149	707	79.0	21.0	3,762
	1840—49	1,955	473	2,428	80.6	19.4	4,149	
プロシア	1870—76	2,189	398	2,587	84.6	15.4	5,480	
	1816—20	3,187	774	3,961	80.4	19.6	4,102	
	1821—30	8,719	1,890	10,109	82.2	17.8	4,618	
	1831—40	11,435	2,534	13,969	81.9	18.1	4,525	
	1841—50	13,545	3,119	16,394	81.1	18.9	4,238	
	1851—60	17,175	4,020	21,195	81.1	18.9	4,238	
	1861—70	22,484	5,333	27,817	80.8	19.2	4,208	
	1871—76	16,425	3,724	20,149	81.5	18.5	4,405	
ババリア	1857—58	1,341	343	1,684	79.6	20.4	3,902	
	1861—62	1,775	436	2,211	80.3	19.7	4,076	
	1866—70	2,172	529	2,701	80.4	19.6	4,102	
サクソニー	1830—34	386	109	495	77.8	22.2	3,504	
	1847—50	1,165	328	1,493	78.1	21.9	3,566	
	1851—60	4,004	1,055	5,059	79.1	20.9	3,785	
	1861—70	5,297	1,333	6,630	79.9	20.1	3,975	
	1871—76	3,625	870	4,495	80.7	19.3	4,181	
ウルエンベルグ	1846—60	2,138	488	2,626	81.4	18.6	4,376	
	1872—75	988	190	1,178	83.9	16.1	5,211	
バーデン	1864—69	1,024	176	1,200	85.3	14.7	5,803	
	1870—74	939	179	1,118	84.0	16.0	5,250	
ヘッセンダルムスタット	1866—71	754	156	910	82.8	17.2	4,814	
スイス	1876	474	66	540	87.8	12.2	7,192	
	1836—40	9,561	3,307	12,868	74.3	25.7	2,891	
	1841—45	11,078	3,669	14,747	75.1	24.9	3,056	
	1846—50	13,136	4,093	17,229	76.3	23.7	3,219	
	1851—55	13,596	4,601	18,197	74.8	25.2	2,968	
	1856—60	15,314	4,694	20,008	76.5	23.5	3,255	
	1866—70	20,037	4,911	24,948	80.3	19.7	4,076	
	1871—76	25,244	6,839	32,183	78.7	21.3	3,695	
オーストリア	1851—54	2,178	475	2,653	82.1	17.9	4,586	
	1873—77	11,429	2,478	13,907	82.1	17.9	4,586	
ハンガリー	1851—54	11,237	353	1,590	77.8	22.2	3,500	
イタリア	1864—66	1,537	375	1,912	80.4	19.6	4,102	
	1867—71	3,012	782	3,794	79.4	20.6	3,854	
	1872—77	4,770	1,195	5,965	80.0	20.0	4,000	
スペイン	1859	141	57	198	71.2	28.8	2,472	

資料; Morselli, H., Suicide, 3rd. 1899. p. 190.

ワグナーやモルセリーにつづいて、自殺性比を検討した多くの研究が発表されている。そのうち、おもなものをあげると、Öttingen, A., Die Moralstatistik. 3. Aufl. 1882, S. 770 u. ff., Rehfish, G., Der Selbstmord 1893. S. 67 u. ff., Mayr, G., Selbstmordstatistik im Handw. d. Staatswiss. 2. Aufl. vl. Bd. 1901. S. 708 u. ff., Rost, H., Der Selbstmord, 1905. S. 23 u. ff., Krose, Die Ursachen der Selbstmordhäufigkeit, 1906. S. S. 15. u. ff., Prinzing, Fr., Handbuch der mediz. Statistik, 1906. S. 355 u. ff., Miner, R., Suicide and its Relation to climatic and other Factors, 1922. pp. 29—33, Frenay, A., The suicide problems in the U. S. 1926. p. 72, Cavan, R., Suicide, 1928. pp. 306—310, Dublin, L., To Be or Not To Be, 1933. pp. 43—51 などある。

これらの諸研究の結果は、すべてワグナーやモルセリーの研究を追証しているのであつて、男子の自殺数は女子の自殺数をはるかに上回っているという事実は、動かしがたい一つの統計法則としてみとめられるに至つている。

この統計法則と反対の事実は、めずらしくもインドにおいてみられるとして、マイヤー (Mayr) は、つぎのような統計をあげている。(Mayr, G., Statistik and Gesellschaftslehre Bd. III. 1917. S. 300.)

インドにおける男子自殺100につき女子自殺数 (1907)

マドラス.....134.4	バンジャブ.....127.1
ビルマ.....85.7	ボンベイ.....108.5
ベンガル.....177.1	東ベンガル; アッサム.....149.0
アグラ; オード.....293.8	中央州.....99.9
北西州.....183.0	全地域.....171.4

インドでは、妻の本分は、夫と生死をとともにすることにあつて、夫が死亡した場合には、妻は自ら進んで夫の後を追うことが徳と考えられ、自殺の仕方は、通常、火中に身を投ずるといわれている。(Westcott, W., Suicide, 1885, p. 163.) またこの妻の殉死慣習 (suttee custom) は、1930年代にも存続していたといわれている。(Faris, R., Social Disorganization, 1948. p. 199.)

インドでは、現在でも、妻の殉死慣習は残存しているかどうか、また女子の自殺数は男子の自殺数を超過しているかどうかを知るために、1958年に、インドへ出張された館総務部長に、情報を手に入れてもらえるよう依頼したところ、チャンドラ・セカーラ氏の話では、自殺に関する正確な統計資料は欠けているが、インドのその慣習は現今でも大した変化がみられないから、おそらく今日の自殺情況も以前と大差があるまいということであつた。

最近における自殺性比を観察するにさきだつて、その計算方法について一言しておかなければならない。ワグナーやモルセリーの場合にみられるように、男女の自殺数そのものにもとづいて、女の自殺1につき男の自殺数。または男の自殺100につき女の自殺数を計算するような自殺性比は、マイヤーの用語によると、自殺の「単純性比」(einfache Geschlechtsrelation)であつて、男女の人口はほぼ均しいという前提のもとで計算されたものである。ところが、男女の人口は必ずしも均しくない。女子人口は男子人口よりも多い社会では、男女の自殺数は同じであつても、女子の自殺頻度は男子のそれよりも低くならなければならない。したがつて、自殺性比は、人口と自殺数との関係から計算された男女の自殺率の対比によつて求めたもの、いわゆる自殺の「統合性比」(vereinigte Geschlechtsrelation)をもつてするほうが、いつそう合理的であるといわなければならない。

マイヤーは、かつてドイツの統計資料にもとづいて、自殺の「単純性比」と「統合性比」を計算

した。その結果を示すと、つぎのようである。⁴⁾

ドイツにおける自殺の「単純性比」と「統合性比」

年	次	男自殺100にたいする 女自殺数	男自殺率にたいする 女自殺率の割合 %
1893		25.0	24.0
1894		25.4	24.4
1895		26.9	25.9
1896		27.6	26.7
1897		26.1	25.3
1898		26.8	25.9
1899		27.2	26.2
1900		26.8	26.1
1901		25.2	24.4
1902		26.3	25.6
1903		27.1	26.2
1904		28.5	27.7
1905		29.2	28.4
1906		30.5	29.6
1907		31.0	30.1
1908		29.1	28.3

日本における自殺の「単純性比」と「統合性比」

年	次	男自殺100につき女 自殺数	男自殺率にたいする 女子自殺率 %
1945		74.4	66.3
1946		73.4	59.4
1947		72.5	69.4
1948		74.0	71.1
1949		69.2	66.5
1950		66.1	63.5
1951		70.6	67.9
1952		72.0	69.3
1953		69.7	67.2
1954		63.2	61.2
1955		62.5	60.1
1956		67.2	65.1
1957		67.1	64.9

いする女子自殺率の割合を意味している。

最近における主要国の男女別自殺率と自殺性比を示すと、つぎの第1表のようである。

第1表 主要国の男女別自殺率および自殺性比
(人口10万につき)

国名	年次	自殺率		男子自殺率に対する 女子自殺率の割合 (%)
		男子	女子	
オランダ	1955	7.5	4.6	61.3
日本	1955	21.6	19.0	60.1
イギリス	1955	14.3	8.4	58.7
西ドイツ	1955	25.8	12.9	50.0
デンマーク	1955	32.0	14.8	46.3
オーストリア	1956	32.4	14.5	44.8
イタリア	1953	9.2	3.9	43.4
ハンガリー	1956	27.9	11.8	42.3
スイス	1955	31.4	12.4	39.5

4) Mayr, G., Statistik and Gesellschaftslehre, Bd. III. 1917. S. 298.

5) Morselli, H., ibid. p. 195.

左の表でみると、自殺の「単純性比」と「統合性比」とは一致していないで、前者は、後者にくらべて、いずれの年次においてもやや大きいことがわかる。いま、日本の統計資料にもとづいて、自殺の「単純性比」と「統合性比」を計算すると、つぎのようである。

左の表でみると、日本でも、ドイツの場合と全く同じように、自殺の「単純性比」は、「統合性比」よりも常に大きいことがわかる。これは、いうまでもなく、男女の人口は同数でないからである。

モルセリーは、自殺の「単純性比」と「統合性比」とのあいだの開きがきわめて小さいという理由で、自殺の「単純性比」を計算することで満足したのである。⁵⁾ しかし、厳密にいうならば、男女の自殺頻度の比例関係は自殺の「統合性比」をもつてしなければならない。私が、これからしばしば用いるであろう自殺性比という用語は、男子自殺率にた

ニュージーランド	1955	12.9	5.1	39.5
ベルギー	1955	20.0	7.3	36.5
オーストリア	1955	15.1	5.4	35.8
スウェーデン	1953	9.1	2.9	31.9
フランス	1955	24.7	7.8	31.6
スウェーデン	1955	27.2	8.5	31.3
カナダ	1956	11.7	3.5	29.9
アメリカ	1955	16.0	4.6	28.8
ノルウェー	1955	11.7	3.3	28.2
ポルトガル	1953	16.6	3.9	23.5

資料； Annuaire démographique, 1957.

上の第1表でみると、自殺率の高低にかかわらず、いずれの国においても、女子の自殺率は、男子の自殺率を常に下回っている。すなわち女子の自殺傾向は、男子のそれにくらべて、常に低いといわなければならない。自殺性比に関するワグナー以来の統計法則は、今日においても、なお変化することなく存続しているといつてよい。

男子の自殺傾向は、女子のそれにくらべていちじるしく高い理由として、(1) 男子は社会的経済的活動の範囲が広く、したがって、さつとして絶望におちいる機会の多いこと、(2) 家族を扶養する責任を負っていること、(3) 世に殉して奮闘しなければならないこと、(4) 自殺を決意する勇氣に富んでいることなどがあげられている。⁶⁾ また女子の自殺傾向は、男子のそれにくらべて、いちじるしく低い理由として、(1) 女子は逆境にも順応しやすいこと、(2) 自己犠牲心の強いこと、(3) 致命的な自殺手段を選ぶことの少ないことなどがあげられている。⁷⁾

2. 自殺性比の国際的差異

男子の自殺率にたいする女子の自殺率の割合は、すでに述べたように、いずれの国でも、またいずれの時代でも、いちじるしく低いが、第1表をみて、たれもが気づくことは、国によつて自殺性比にいちじるしい差異のあることである。たとえば、男子の自殺率にたいする女子の自殺率の割合は、オランダや日本では60%を越えているが、カナダ、アメリカ、ノルウェーでは30%以下であり、ことにポルトガルでは23.5%にすぎない。

自殺性比の地域的差異は、すでに古くから問題にされていて、ワグナーは、「一般に男子の自殺の多いところでは女子の自殺も多い」⁸⁾ といっている。これを拡張解釈すれば、男女の自殺率の高い社会では、男子の自殺率にたいする女子の自殺率の割合も高いということになる。日本のような国では、自殺率は男女ともに高く、また男子の自殺率にたいする女子の自殺率の割合も高いから、ワグナーの立言は當をえているが、スイスでは、男子の自殺率は相當に高いが、女子の自殺率は比較的に低く、したがって、男子の自殺率にたいする女子の自殺率の割合は低いのであつて、ワグナーの立言は、この場合、必ずしも正当でないであろう。

またワグナーは、女子の自殺100につき男子の自殺は、プロシアでは417であり、フランスでは322であるという統計的事実にもとづいて、自殺数そのものは、プロシアよりもフランスのほうが少ないが、女子の自殺を不自然なものとする場合、フランスの女子は、プロシアの女子よりもい

6) Wagner, A., ditto., S. 23.

Morselli, H., ibid. p. 195.

Öttingen, A., Moralstatistik, 3 Aufl. 1882. S. 770.

7) Morselli, H., ibid. p. 195.

Elliott, M., Social Disorganization, 3rd. ed. 1950. p. 306.

8) Wagner, A., ditto., S. 281.

つそう不都合な状態にある』⁹⁾ といっている。

ワグナーの見解によると、自殺率の高低にかかわらず、女子の社会的地位の劣っている社会では、男子の自殺率にたいする女子の自殺率の割合は大きいことになる。第1表でみると、男子の自殺率にたいする女子の自殺率の割合は、ポルトガルの23.5%が最も低い。西欧諸国のうちで、ポルトガル婦人の社会的地位は最もすぐれているといつてよいのであろうか。私には習俗についての知識が欠けているので、断定はできないが、イギリスやフランスの女子の社会的地位は、ポルトガルの女子のそれよりも劣っているかどうかははなはだ疑わしい。

モルセリーは、スペインでは、女子の自殺割合のいちじるしく大きいことを指摘して、(2頁の統計表をみよ) その原因をスペインの女子の情熱的であることに帰している。¹⁰⁾ モルセリーの調査した1859年には、スペインにおける男子自殺数と女子自殺数の割合は、その他の欧州諸国におけるそれよりもいちじるしく接近しているので、その原因をスペイン婦人の情熱的であることに求めたのであろうが、第1表で明らかのように、最近におけるスペインでは、男子自殺率にたいする女子自殺率の割合は決して高くはない。スペイン婦人の情熱が自殺に駆り立てる真の原因であるとしたならば、今日においても、スペインでは、女子自殺率は男子自殺率に接近していなければならないはずである。

男子自殺率にたいする女子自殺率の割合は、国によつて、また同じ国でも時代によつていちじるしい差異と変動がみられるのであつて、その原因は、ワグナーやモルセリーの説明するように、単純なものではなく、複合的なものであるにちがいない。そして或る国で探究された原因は、そのまま他の国にあてはまるとはかぎらないし、同じ国においても、時代によつて異なる原因を探し求めなければならない場合もあろう。

3. 自殺性比の変動

男子の自殺率にたいする女子の自殺率の割合は、国によつて差同があるが、いずれの国についてもいえることは、女子の自殺傾向は、男子のそれよりも常に低いことである。しかし、自殺性比は、出生性比のように、時と処とにかかわらず、恒常不変であるというのではなく、どの国でも、時間的に変動している。そこで、自殺性比は、これまでに、日本でどのように推移したかを観察するために、1899年から1957年までの男子自殺率にたいする女子自殺率の割合を示すと、次頁の第2表のようである。

第2表でみると、男子自殺率にたいする女子自殺率の割合は、年によつて多少の変動があつて、たとえば1931年の58.1%のような低い年もあれば、また1941年の71.2%のように高い年もあるが、この59年間における平均値は63.2%であり、その平均偏差は2.74、変動係数は0.0433である。この変動係数は、同じ59年間における一般自殺率そのものの変動係数0.121(本誌第74号、22頁をみよ)よりもはるかに低いのであるから、自殺性比はきわめて安定的であるといえよう。

つぎに日本における自殺性比の推移にたいして、諸国における自殺性比はどのように推移しているかを観察しよう。いま、附表第1(本稿の終りに掲げてある)によつて、主要諸国における自殺性比の変動係数を計算すると、つぎのような結果になる。

9) Wagner, A., ditto. S. 23.

10) Morselli, H., ibid. p. 192.

第2表 日本における自殺性比の推移

年次	男子自殺率	女子自殺率	男子自殺率にたいする女子自殺率(%)	年次	男子自殺率	女子自殺率	男子自殺率にたいする女子自殺率(%)
1899	16.6	10.2	61.4	1929	25.0	15.4	61.6
1900	16.4	9.7	59.1	1930	27.2	16.0	58.8
1901	21.3	13.2	62.0	1931	27.7	16.1	58.1
1902	21.5	13.5	62.8	1932	27.8	16.6	59.7
1903	23.6	14.2	60.2	1933	27.0	17.0	63.0
1904	23.5	14.5	61.7	1934	26.4	16.2	61.4
1905	20.9	13.0	62.2	1935	25.1	15.8	62.9
1906	19.2	12.5	65.1	1936	27.7	16.1	58.1
1907	19.7	13.1	66.5	1937	25.0	15.1	60.4
1908	20.5	13.2	64.4	1938	21.0	12.9	61.4
1909	22.8	13.7	60.1	1939	17.8	11.8	66.3
1910	23.3	13.7	58.8	1940	17.1	11.2	65.5
1911	22.6	13.8	61.1	1941	15.3	10.9	71.2
1912	22.7	13.6	59.9	1942	14.6	10.4	71.2
1913	24.3	14.8	60.9	1943	14.7	9.6	65.3
1914	25.5	15.1	59.2	1944	15.7	10.1	64.3
1915	23.7	13.5	56.9	1945	18.7	12.4	66.3
1916	21.8	12.9	59.2	1946	26.6	15.8	59.4
1917	20.3	12.7	62.6	1947	18.6	12.9	69.4
1918	22.0	14.3	65.0	1948	18.7	13.3	71.1
1919	21.8	13.5	61.9	1949	20.9	13.9	66.5
1920	23.3	14.7	63.1	1950	24.1	15.3	63.5
1921	24.3	15.7	64.6	1951	21.8	14.8	67.9
1922	24.2	15.9	65.7	1952	21.8	15.1	69.3
1923	24.1	15.2	63.1	1953	24.4	16.4	67.2
1924	23.5	15.2	64.7	1954	29.1	17.8	61.2
1925	25.1	15.9	63.3	1955	31.6	19.0	60.1
1926	25.2	16.0	63.5	1956	29.8	19.4	65.1
1927	25.7	16.2	63.0	1957	29.1	18.9	64.9
1928	25.5	16.4	64.3				

自殺性比の変動係数

国名	平均値	平均偏差	変動係数
日本	63.20	2.74	0.0433
アメリカ	31.80	2.36	0.0742
フランス	32.30	2.94	0.0909
イタリア	34.18	3.25	0.0951
カナダ	31.40	3.28	0.1044
スウェーデン	25.80	3.64	0.1411
イギリス	40.65	6.52	0.1604
スイス	28.88	5.17	0.1790
ノールウェー	24.73	4.83	0.1953
オランダ	43.44	10.54	0.2426

これら諸国における自殺性比の変動係数をみると、日本の0.0433が最も小さく、きわめて安定的である。日本の自殺性比も、年によつて変動がないわけではないが、このように安定的であるのは、全体の傾向として、男子自殺率と女子自殺率とがほぼ比例関係を保ちながら変動しているからである。この点については次節で説明するであろう。

自殺性比の変動係数は、日本についてアメリカの0.0742が小さいが、それにしても、日本の約2倍近くも大きい。その他の国々の自殺性比の変動係数にいたつては、いずれもはるかに大きく、オランダでは実に0.2426に達している。

これら諸国における自殺性比の変動係数は、日本の場合にくらべて、なぜ大きいのか。日本におけ

る自殺性比そのものは、第2表でみられるように、きわめて大きい、自殺性比の変動係数はきわめて小さい。これに反して、西欧諸国における自殺性比そのものは、附表第1でみられるように、一般に小さいが、自殺性比の変動係数は大きい。それゆえに、自殺性比の安定度は、自殺性比の大小と無関係であるといわなければならない。自殺性比の変動係数は、男女自殺率が比例的に変動しない場合に大きくなるのである。これを具体的にいうと、西欧諸国では、ことにノールウェーやオランダでは、男子自殺率の変動は比較的小さいが、これに反して女子自殺率の変動は大きく、近年においては、男子自殺率にたいする女子自殺率の割合はいちじるしく高くなつてきている。これが西欧諸国における自殺性比の変動係数を大きくしている主要な原因であるといつてよい。

4. 男女自殺率の変動

自殺性比の変動係数は、すでに述べたように、国によつて異なつてゐるが、大なり小なり変動している。自殺性比が時によつて変動するのは、いうまでもなく、男女の自殺率が決して固定的でなく、またその変動割合が比例関係を保つていないからである。日本では男女の自殺率は、どのような割合で変動したかを検討するために、第2表に示されている男女の自殺率を指数化すると、つぎの第3表のようである。

第3表 日本における男女の自殺指数
(1899—1957)

年次	自殺指数		年次	自殺指数		年次	自殺指数	
	男子	女子		男子	女子		男子	女子
1899	100.0	100.0	1919	131.3	124.5	1939	107.2	115.7
1900	98.8	95.1	1920	140.4	144.1	1940	103.0	109.8
1901	128.3	129.4	1921	146.4	153.4	1941	92.2	106.9
1902	129.5	132.4	1922	145.8	155.9	1942	88.0	102.0
1903	142.2	139.2	1923	145.2	149.0	1943	88.6	94.1
1904	141.6	142.2	1924	141.6	149.0	1944	94.6	99.0
1905	125.9	127.5	1925	151.2	155.9	1945	112.7	121.6
1906	115.7	122.5	1926	151.8	156.9	1946	160.2	154.9
1907	118.7	128.4	1927	154.8	158.8	1947	112.0	126.5
1908	123.5	129.4	1928	153.6	160.8	1948	112.7	130.4
1909	137.3	134.3	1929	150.6	151.0	1949	125.9	136.3
1910	140.4	134.3	1930	163.4	156.9	1950	145.2	150.0
1911	136.1	135.3	1931	166.9	157.8	1951	131.3	145.1
1912	136.7	133.3	1932	167.5	162.7	1952	131.3	148.0
1913	146.4	145.1	1933	162.7	166.7	1953	147.0	160.8
1914	153.6	148.0	1934	159.0	158.8	1954	175.3	174.5
1915	142.8	132.4	1935	151.2	154.9	1955	190.4	186.3
1916	131.3	126.5	1936	166.9	157.8	1956	179.5	190.2
1917	122.3	124.5	1937	150.6	148.0	1957	175.3	185.3
1918	132.5	140.2	1938	126.5	126.5			

上の第3表でみると、男女の自殺指数は、完全な比例関係を保ちながら変動しているわけでないが、両者の変動の幅はいたつて狭い。日本では、男子の自殺率が高くなる場合には、女子の自殺率もまた高くなり、男子の自殺率が低くなる場合には、女子の自殺率も低くなつていて、完全な比例関係を保つていないとはいえ、だいたいにおいて、平行的に変動しているのである。日本における自殺性比がきわめて安定的であるのはこのためであるといつてよい。

自殺性比の変動係数が大きい場合には、男女間における自殺指数の変動も大きいことを予想する。それで、自殺性比変動係数が最も大きいオランダ（7頁をみよ）において、附表第1表におけるオランダの男女別自殺率にもとづいて、男女の自殺指数はどのように推移しているかを示すとつ

ぎの第4表のようである。

第4表 オランダにおける男女の自殺指数
(1901—1954)

年次	自殺指数		年次	自殺指数		年次	自殺指数	
	男子	女子		男子	女子		男子	女子
1901	100.0	100.0	1919	120.5	144.8	1937	119.3	139.7
1902	105.7	96.6	1920	122.7	131.0	1938	131.3	136.2
1903	120.5	82.8	1921	105.7	117.2	1939	121.6	169.0
1904	120.5	106.9	1922	111.4	89.7	1940	158.0	262.1
1905	131.8	96.6	1923	98.9	110.3	1941	88.6	175.9
1906	114.8	110.3	1924	104.5	110.3	1942	109.1	293.1
1907	119.3	106.9	1925	103.4	134.5	1943	108.0	224.5
1908	121.6	110.3	1926	114.8	172.4	1944	84.1	193.1
1809	125.0	113.8	1927	117.0	155.2	1945	144.3	213.8
1910	103.4	117.2	1928	114.8	151.7	1946	113.6	193.1
1911	104.5	113.8	1929	111.4	206.9	1947	102.3	144.8
1912	105.7	93.1	1930	137.5	182.8	1948	97.7	135.2
1913	122.7	96.6	1931	131.8	172.4	1949	94.3	141.4
1914	105.7	96.6	1932	145.5	162.1	1950	84.1	127.6
1915	100.0	117.2	1933	133.0	165.5	1951	89.8	141.4
1916	90.9	113.8	1934	136.4	165.5	1952	93.2	151.7
1917	101.1	117.2	1935	127.3	165.5	1953	96.6	158.6
1918	110.2	148.3	1936	123.9	186.2	1954	93.2	148.3

上の第4表でみると、男女の自殺指数は、第1次世界大戦ごろまでは、きわめて狭い幅を保ちながら、ともに推移し、そして女子の自殺指数の上昇傾向は、男子の自殺指数の上昇傾向よりも常に弱い、その後、オランダの社会学者ガルガス (Gargas)¹¹⁾ がオランダの男女別自殺率についているように、これまでとは全く反対に、男子自殺率にたいする女子自殺率ははだいに高くなつたために、女子の自殺指数は、男子の自殺指数をはるかに上回つて上昇傾向をつづけている。したがつて、男女の自殺指数の開きはいちじるしく大きくなつている。もちろん、女子の自殺率そのものは、男子の自殺率を超過するほどまでに大きくなつたわけでないが、男子の自殺率はわずかに上昇するか、あるいはほとんど停止状態にあるにたいして、女子の自殺率は、おそろしい勢いで上昇している。

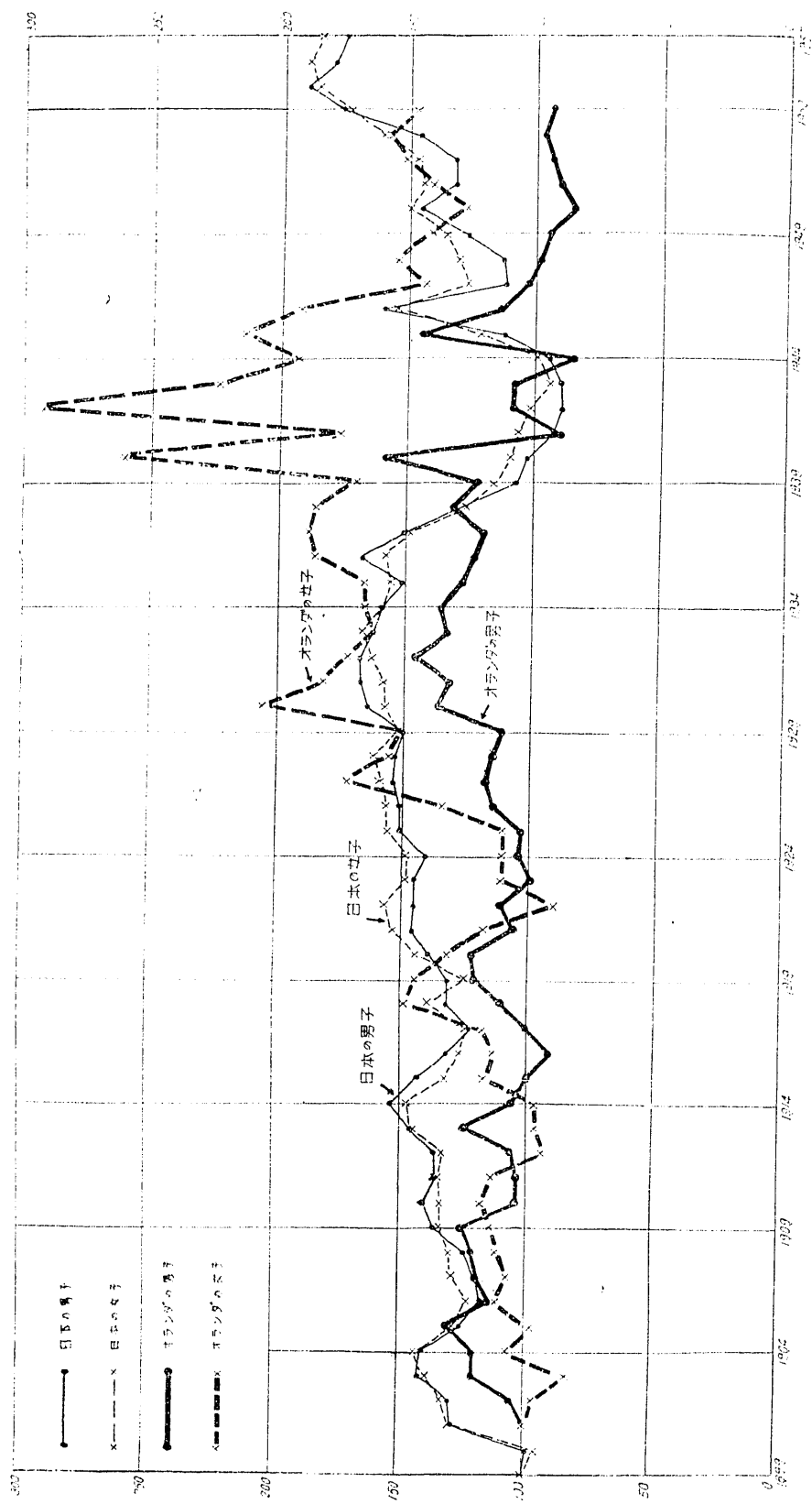
ワグナーは、「自殺の増加割合は男子にくらべて女子のほうが少なく、フランスでは、1835—44年と1851—60年の期間において自殺の増加率は、男子の43.8%にたいして、女子の場合には37.9%にとどまつている」¹²⁾ といつているが、これは19世紀における欧州の自殺事情についていうことであろうが、20世紀にはいつてから、ことに第1次世界大戦後には、西欧諸国において、男子自殺率の上昇傾向は鈍化しつつあるにたいして、女子自殺率ははだいに男子自殺率に接近する傾向を示しているようにみうけられる。このために、男女の自殺指数の開きは大きくなり、また自殺性比の変動係数も大きくなつてきたのであろう。

日本における男女の自殺指数はきわめて狭い幅を保ちながら推移しているにたいして、オランダにおける男女の自殺指数はおそろしく大きな幅をもつて推移しているかを一と目で看取しうるように、図示したのがつぎの第1図である。

11) Gargas, S., Suicide in the Netherlands. The American Journ. of Sociology March, 1932. p. 700.

12) Wagner, A., ditto. S. 23.

第1図 日本およびオランダの男女別自殺指数



5. 地域別にみた自殺性比

自殺性比は、国際的にいちじるしい差異のあることについては、すでにくわしく述べたとおりであるが、一国内においても、地域別に差異があろうことは容易に予想することができる。モルセリ一は、都府別に男女の自殺率を比較して、「都市では、苦悩は男子のほうに多く、したがって男子の自殺率を高めている」¹³⁾ といっている。すなわち都市における自殺性比は、田舎のそれよりも高いというのである。

ここでは、まず第1に、府県別にみた自殺性比の差異を観察しよう。いま、附表第2の「府県別第5表 府県別自殺性比

都道府県	年次								順位							
	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1955	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1955		
1 北海道	49.4	68.5	61.4	58.8	69.5	53.0	65.5	13	39	20	27	33	5	29		
2 青森	24.6	47.7	47.4	46.8	58.2	41.3	39.8	1	14	5	6	14	2	2		
3 岩手	40.4	46.3	52.2	72.7	60.2	68.8	60.0	5	9	9	43	20	27	20		
4 宮城	35.8	46.6	56.1	50.5	91.1	73.3	66.3	2	10	13	13	43	32	32		
5 秋田	49.5	51.6	52.1	54.5	69.8	56.2	64.0	14	19	8	21	34	8	26		
6 山形	66.3	46.0	62.5	53.5	58.8	70.4	65.9	36	8	22	19	16	29	31		
7 福島	65.0	51.6	52.3	52.9	103.8	61.6	67.1	33	19	10	15	45	17	35		
8 茨城	57.4	70.7	66.0	65.2	67.9	71.1	62.3	23	40	27	38	29	31	24		
9 栃木	49.7	46.6	46.7	48.3	62.0	94.1	65.5	15	10	4	10	24	45	29		
10 群馬	56.0	47.8	57.6	61.7	61.4	75.5	70.0	22	13	17	31	22	37	39		
11 埼玉	59.0	58.9	66.8	59.2	72.2	68.6	69.7	27	25	28	28	37	25	37		
12 千葉	49.7	61.9	67.8	53.1	52.0	68.6	73.6	15	30	31	17	5	25	41		
13 東京都	58.6	59.5	83.3	71.9	67.6	64.1	65.3	26	26	45	41	28	22	28		
14 神奈川県	49.2	50.0	69.4	46.8	74.8	57.1	57.5	12	15	34	6	40	10	18		
15 新潟	71.3	61.5	56.1	48.1	69.4	76.0	66.9	40	28	13	9	32	39	34		
16 富山	59.3	34.1	57.0	49.8	68.6	56.8	56.8	28	3	16	11	31	9	16		
17 石川	50.8	50.9	68.2	47.5	56.5	46.4	53.6	18	16	32	8	11	3	11		
18 福井	45.3	45.0	85.3	50.2	55.7	70.9	54.8	8	6	46	12	9	30	12		
19 山梨	47.0	84.5	79.8	63.4	56.1	77.6	61.6	11	45	44	34	10	40	22		
20 長野	73.7	67.5	51.5	72.3	95.1	73.5	79.7	42	37	7	42	44	33	44		
21 岐阜	65.1	84.6	74.8	80.0	76.8	74.8	61.6	34	46	41	45	41	35	22		
22 静岡県	68.5	67.8	64.1	58.1	65.5	63.2	55.0	38	38	25	25	26	20	13		
23 愛知県	74.6	66.5	61.1	66.2	59.5	75.4	77.6	43	35	19	39	19	36	43		
24 三重	46.9	71.4	74.1	63.7	70.1	53.2	76.2	10	42	39	36	36	6	42		
25 滋賀	50.2	65.9	56.3	51.8	74.4	74.2	35.3	17	34	15	14	38	34	1		
26 京都	51.5	65.0	78.9	62.9	67.9	62.4	69.7	20	32	43	33	29	19	37		
27 大阪府	58.3	65.2	64.0	64.7	79.3	58.6	66.8	25	33	24	37	42	12	33		
28 兵庫県	54.6	57.1	70.0	57.6	60.4	69.5	60.8	21	24	36	24	21	28	21		
29 奈良	43.7	51.9	70.7	58.2	59.3	62.1	55.3	6	21	37	26	18	18	14		
30 和歌山	79.3	47.4	77.9	67.2	58.4	92.9	70.1	45	12	42	40	15	44	40		
31 鳥取	45.6	45.3	68.3	40.1	53.0	60.2	67.4	9	7	33	4	6	15	36		
32 島根	77.3	66.1	64.5	53.0	49.3	88.5	53.5	44	36	26	16	2	42	10		
33 岡山	63.2	73.3	69.9	60.3	70.0	88.5	59.9	31	43	35	29	35	42	19		
34 広島	71.4	55.5	59.1	55.1	65.0	57.4	45.1	41	23	18	22	25	11	3		
35 山口	71.0	61.9	62.2	60.4	55.3	63.5	65.1	39	30	21	30	8	21	27		
36 徳島	124.1	71.2	67.6	73.9	50.5	98.8	83.1	46	41	30	44	4	46	45		
37 香川県	67.0	61.7	49.8	86.6	58.9	78.2	87.7	37	29	6	46	17	41	46		
38 愛媛	60.5	76.2	67.5	57.5	49.7	59.5	50.8	29	44	29	23	3	13	7		
39 高知県	36.8	42.2	62.8	62.3	61.6	64.5	52.0	3	4	23	32	23	23	8		
40 福岡	45.1	51.4	54.6	54.0	53.0	59.8	45.1	7	18	11	20	6	14	3		
41 佐賀	38.2	60.7	41.8	53.1	123.6	67.6	56.7	4	27	2	17	46	24	15		
42 長崎	65.9	44.6	46.6	42.4	66.7	54.6	47.2	35	5	3	2	27	7	5		
43 熊本	63.2	55.3	56.0	46.5	56.8	60.8	52.5	31	22	12	5	12	16	9		
44 大分	57.6	51.2	73.4	63.6	74.4	75.9	50.4	24	17	38	35	39	38	6		
45 宮崎	61.9	33.6	74.4	41.9	56.8	39.8	57.0	30	1	40	1	12	1	17		
46 鹿児島	51.5	33.8	37.4	45.0	45.3	50.0	62.6	19	2	1	3	1	4	25		

13) Morselli, H., *ibid.* p. 201.

にみた男女別自殺率」にもとづいて、1900年から1955年にわたつて、毎10年毎の府県別自殺性比を示すと、つぎの第5表のようである。

上の第5表でみると、自殺性比は、府県によつていちじるしい差異がある。たとえば、1900年の自殺性比は、青森県ではわずか24.6%であつて、男子の自殺4にたいして女子の自殺は1にすぎない。このほかに自殺性比の比較的低い府県をあげると、宮城県(35.8%)、高知県(36.8%)、佐賀県(38.2%)、岩手県(40.4%)、奈良県(43.7%)、福岡県(45.1%)、福井県(45.3%)、鳥取県(45.6%)、三重県(46.9%)、山梨県(47.0%)、神奈川県(49.2%)、北海道(49.4%)などである。

これに反して、徳島県の自殺性比は実に124.1%にも達して、女子の自殺率は男子の自殺率を超過している。このほかに自殺性比の比較的に高い府県をあげると、和歌山県(79.3%)、島根県(77.3%)、愛知県(74.6%)、長野県(73.7%)、広島県(71.4%)、新潟県(71.3%)、山口県(71.0%)などがある。

自殺性比は、府県によつていちじるしい差異があるが、しかし、この府県別差異がいずれの年次においてもほぼ同一の順位を保つていたならば、自殺性比の差異は、それぞれの府県における特性をあらわすものとして、はなはだ興味があらう。しかし、府県別自殺性比は、実際には年によつて同一である場合がきわめて少ない。すなわち、青森県、福井県、福岡県、長崎県、鹿児島県などの自殺性比は、だいたいにおいて低く、また長野県、岐阜県、愛知県、三重県、和歌山県、岡山県、徳島県などの自殺性比は、だいたいにおいて高いが、これはむしろ例外的な事象とみるべきであつて、ある年次において自殺性比が低い府県が、他の年次には、高い自殺性比を示している場合、またその逆の場合がはなはだ多い。

たとえば、宮崎県の自殺性比は、1910年には第1位であるが、1920年には第40位を、そして1930年にはまた第1位を示している。徳島県の自殺性比は、1930年には第44位であるが、1940年には第4位を、そして1950年には第46位を示している。長野県の自殺性比は、1920年には第7位であるが、1930年には第42位を示している。宮城県の自殺性比は、1900年から1930年にわたつて、比較的に低いが、1940年には第43位を示している。

結局、それぞれの府県における自殺性比の推移は、多くの場合、気まぐれであり、不安定であるから、遺憾なことには、自殺性比の地域的特性をとらえることはできないといわなければならない。

なおまた、日本では、東京都、大阪市、京都市、名古屋、神戸市、横浜市などの大都市をふくむ都府県の自殺性比は、第5表で明らかのように、必ずしも低くない。いかえると、これらの府県においては、女子の自殺率にたいする男子の自殺率は高いとはいいがたい。すなわち日本では、自殺性比に関するモルセリーの見解をそのままみとめることができないような結果を示している。

この事実をいつそうはつきりさせるために、いま、6大都市の男女別自殺率と自殺性比を示すと、次頁の第6表のようである。

第6表でみると、6大都市における自殺性比は、多くの場合、全国の自殺性比よりもむしろ高い。第2表をみると、全国の自殺性比は、1920年には63.1%、1925年には63.3%、1930年には58.8%、1935年には62.9%、1940年には65.5%、1950年には63.5%、1954年には61.2%となつてゐる。

6大都市における自殺性比が、いずれも全国の自殺性比よりも低いのは、1950年にみられるだけであつて、その他の年次においては、6大都市における自殺性比のうちで、全国の自殺性比より低く

第6表 6大都市における男女別自殺率と自殺性比

年 次	東 京			横 浜			名 古 屋		
	男子自殺率	女子自殺率	性 比	男子自殺率	女子自殺率	性 比	男子自殺率	女子自殺率	性 比
1920	16.2	15.2	93.8	22.8	15.1	66.2	25.0	14.8	59.2
1925	15.0	13.3	88.7	30.8	18.8	61.0	23.9	17.0	71.1
1930	17.9	14.6	81.6	29.6	13.7	46.3	28.5	19.8	69.5
1935	23.0	15.5	67.4	29.4	14.2	48.0	23.2	17.2	74.1
1940	12.6	8.9	70.6	11.1	9.7	87.4	10.8	6.7	62.0
1950	25.7	16.2	63.0	23.4	13.3	58.0	29.9	18.9	63.2
1954	30.9	20.3	65.7	29.5	13.1	61.4	30.3	18.3	60.4

	京 都			大 阪			神 戸		
	男子自殺率	女子自殺率	性 比	男子自殺率	女子自殺率	性 比	男子自殺率	女子自殺率	性 比
1920	23.0	19.2	83.5	16.3	12.8	78.5	15.4	14.0	91.0
1925	24.8	14.9	60.1	20.6	17.0	82.5	30.7	18.2	59.3
1930	26.2	16.3	62.2	24.5	16.4	66.9	33.0	19.9	60.3
1935	22.9	13.3	58.1	20.6	12.8	62.1	20.1	14.4	71.6
1940	15.2	12.9	84.9	9.2	8.0	87.0	10.0	6.3	63.0
1950	31.1	17.6	56.6	22.4	13.2	58.9	33.0	16.8	50.9
1954	31.4	19.9	63.4	40.0	23.2	58.0	38.9	24.2	62.2

なっているのは、ほとんど例外的である。そして全国の自殺性比にくらべて、大都市の自殺性比が低い場合でも、それはきわめて小さな幅にすぎない。

6大都市における自殺性比は、多くの場合、全国の自殺性比よりもむしろ高く、しかも80%~90%という高率で、全国の自殺性比をはるかに上回っている場合さえ少なくない。たとえば、東京都の自殺性比は1920年には93.8%、1925年には88.7%、1930年には81.6%を示しているし、横浜市の自殺性比は1940年には87.4%を示している。また京都市の自殺性比も1920年には83.5%、1940年には84.9%を示し、大阪市の自殺性比も1925年には82.5%、1940年には87.0%を示している。

これで見ると、日本では、大都市の自殺性比は、全国の自殺性比にくらべて、決して低くないのであつて、むしろ高いとさえいいうるであろう。都市生活が男子に多くの苦悩を背負わすことが事実であるとしても、苦悩の重荷は、日本の都市では、女子にも同様の負担になつているにちがいない。そうでなければ、自殺性比はこんなに高くなるはずがない。自殺性比の高いことは、女子の自殺率が男子の自殺率に接近していることを表現したものにすぎないからである。

V 自殺率の年齢別

1. 少年の自殺

人間の行動は、その種類について、またその頻度についても、年齢と密接な関係をもっている。人間は、年齢に応じて、知的、道徳的ならびに肉体的能力が発達するために、年齢的に行動の種類やその頻度に差等がある。たとえば、学令期に達して、初めて就業能力をもち、成人期に達して、初めて刑事責任能力をもつことになる。自殺については、自殺可能年齢というものがある。デュラン・ファデル (Durand-Fardel) によると、1835—44年におけるフランスの自殺25,760

中、5才の自殺者は1人、9才の自殺者は2人、10才の自殺者は2人であると報告されているが、¹⁾このような幼年者の自殺は稀な事例であるといわなければならない。

自殺の頻度は、幼少年期を経過すると、年齢の加わるとともに、しだいに大きくなると、いわれている。また同じ年齢においても、男女によつて、自殺の頻度はいちじるしく異なつていゝといわれている。この問題は、これまでに、多くの研究者たちによつて統計的に実証されたのであつて、私も、自殺と年齢との関係について考察するのであるが、まず第1に、比較的稀であるとせられてゐる幼少年の自殺について観察しよう。

子供も、大人と同じように、不幸や苦痛にたいする感受性をもつていて、大人よりもいつそう敏感であらう。そして子供は、自分の行為の結果がどうなるかを考える能力に欠けているために、実際には、そんなにしばしば自殺しないが、しかし、「生の否定」を志向する場合は案外に多い。このことは、カーバン (Cavan)²⁾が、10才から17才 (平均年齢14才) のアメリカの学童9000人に「これまでに生まれてこなかつたらよかつたとおもつたことがあるか」という質問調査の結果によつても明らかである。(拙著「自殺の国」9—20頁参照)

最近における主要諸国の幼少年 (15才未満) の自殺率を示すと、つぎの第1表のようである。

第1表 主要諸国における幼少年 (15才未満) の自殺率
(人口10万につき)

国名	調査年次	男児自殺率	女子自殺率	全自殺率	
				男子	女子
日本	1952—54	0.9	0.5	24.5	16.5
カナダ	1952—54	0.5	0.2	11.0	3.2
アメリカ	1951—53	0.7	0.2	16.1	4.3
オーストリア	1952—54	0.7	0.3	32.7	15.3
ベルギー	1952—54	2.0	0.4	19.7	7.4
デンマーク	1952—54	1.3	0.2	32.3	16.0
フランス	1952—54	0.6	0.2	24.0	7.2
イタリア	1951—53	0.5	0.2	9.2	3.9
オランダ	1952—54	0.5	—	8.5	4.6
イギリス	1952—54	0.2	0.1	14.2	7.6
スウェーデン	1951—53	0.7	0.1	28.2	9.0
スイス	1952—54	1.1	0.4	34.1	10.1
ノールウェー	1952—54	—	—	11.0	4.3

資料 Rapport épidémiologique et démographique. 1956.

上の第1表でみると、少年の自殺率も国によつていちじるしい差異がある。ノールウェーでは、1952—54年には15才満の少年の自殺は皆無であつたから、その自殺率はゼロであるが、少年の自殺は全くないわけではない。1901—03年には1人、1909—11年には2人、1919—21年には2人の少年自殺があつた。しかし、スウェーデンでは、少年の自殺は、きわめて例外的であつて、自殺率を算出しえないほど少数である。ノールウェーについて、イギリスの男児自殺率0.2、女児自殺率0.1は最も低い。ノールウェーやイギリスのように、全自殺率の比較的低い国 (1952—54年には、イギリスの男子全自殺率は14.2、女子全自殺率は7.6 またノールウェーの男子全自殺率は11.0、女子全自殺率は4.3である) では、それに照応して少年の自殺率も低くなつてゐる。

しかし、オランダやイタリアでは、男子全自殺率はそれぞれ8.5、9.2という低率であるが、男児

1) Morselli, H., *ibid.* p. 221.

2) Cavan, R. Shonle, *The Wish never to have been born*, American Journal of Sociology Jan. 1932.

自殺率はノールウェーやイギリスの場合にくらべてはるかに高く 0.5 である。スイスやデンマークでは、男女の全自殺率が高く、これに照応して男女児の自殺率も高くなっている。ことにベルギーにおける男児の自殺率は 2.0 であつて、世界第 1 位であり、ベルギーにおける男児自殺率は 1.3 であつて、第 2 位を占めている。

日本の男児自殺率は 0.9 であつて、第 3 位を占め、また女児自殺率の 0.5 は世界第 1 位である。日本の全自殺率は世界の最高水準にあると同様、少年の自殺率もまた相当に高いといつてよい。

男児自殺率は、いずれの国においても、女児自殺率よりも高い。このことは、男子全自殺率が女子全自殺率を超過している事実と合致しているのであつて、少年においても、自殺傾向は、女児よりも男児において大きいといわなければならない。

つぎに、日本における少年自殺率の推移傾向を観察しよう。いま、1920～1955年における少年(15才未満)の自殺率を示すと、つぎの第 2 表のようである。

第 2 表 日本における少年(15才未満)の自殺率(人口10万につき自殺数)

	男児自殺率	女児自殺率
1920	2.0	1.6
1925	1.7	1.6
1930	1.5	1.2
1935	1.3	0.7
1940	0.3	0.2
1950	—	0.0
1955	1.1	0.7

左の第 2 表でみると、男女ともに、1920年の自殺率は最も高く、その後、しだいに低下して、1950年には男児の自殺は 1 件もなく、女児の自殺は 2 件であつて、自殺率を算出しえないほど少数である。ところが、1955年には、男児の自殺は 58 件、女児の自殺は 33 件を数え、自殺率はそれぞれ 1.1 と 0.7 であつて、1935年における男女少年の自殺率といちじるしく接近した値を示している。

少年の自殺は、大都市に多いといわれている。³⁾ 日本には、この問題を統計的に検討する十分な資料に欠けているが、私が警視庁の「自殺調書」によつて数え上げたところでは、1955年における自殺総数 1925のうち、15才未満の少年自殺数は 6 である。したがつて、自殺総数にたいする少年自殺数の割合は 0.0031 である。また「人口動態統計」による 1955年における全国の自殺総数は 22,477 であり、そのうち 15才未満の少年自殺数は 91 である。したがつて、自殺総数にたいする少年自殺数の割合は 0.004 である。

自殺総数にたいする 15才未満の少年自殺数の割合は、上の計算で明らかのように、全国の場合にくらべて、東京都の場合のほうがやや小さくなつてゐる。しかし、東京都と全国とでは、人口総数にたいする少年人口の割合が異なつてゐるから、少年人口(5—14才)における自殺率(少年人口 100 万につき自殺数)を計算してみる必要がある。計算の結果によると、東京都の少年自殺率は 2.52、全国の少年自殺率は 4.40 となる。それゆゑに、日本では、少年自殺率は大都市において高いとはいえない。もちろん、この乏しい統計資料でもつて、モルセリーの見解に反駁することは危険であつて、最終的な確言は、今後、この種の統計資料を整備して、再検討を加えてからのことにしたい。

自殺の動機をつきとめることは一般にはなほだ困難であるが、とくに少年の自殺動機を明らかにすることはきわめて困難である。⁴⁾ ただ参考のために、1955年に、東京都における少年自殺者 6 人について、その自殺動機をみると、「父兄にしかられて」2人、「学業の失敗」1人、「厭世」1人、「不明」2人となつてゐる。少年の自殺動機には、おそらく「父兄にしかられて」とか「学業の失

3) Morselli, H., *idid.* p. 222.

4) Mayo-Smith, R., *Statistics and Sociology*, 1900. p. 247.

敗」とかいうのが多いのではなからうかとおもわれる。

2. 国際的にみた年齢別自殺率

少年の自殺については、前節で述べたから、ここでは15才以上の自殺者について観察しよう。まず第1に、最近における主要諸国の年齢別自殺率を示すと、つぎの第3表のようである。

第3表 主要諸国における年齢別自殺率

国名	調査年次	15—19才	20—24才	25—29才	30—39才	40—49才	50—59才	60—69才	70 ≦
(男 子)									
日本	1952—54	26.1	60.0	42.0	23.8	23.8	36.8	58.1	96.4
カナダ	1952—54	3.8	7.3	9.1	11.8	18.8	25.8	30.8	26.2
アメリカ	1951—53	3.9	9.5	12.2	15.0	23.8	32.3	42.4	51.5
オーストラリア	1952—54	11.7	27.4	30.8	28.8	45.7	60.3	56.9	73.6
ベルギー	1952—54	5.5		10.4		23.5	36.6	49.6	73.5
デンマーク	1952—54	8.3	25.4	29.9	43.3	62.0	64.3	59.5	
フランス	1952—54	4.4	7.4	11.5	16.9	34.9	52.8	55.6	78.5
イタリア	1951—53	2.9	7.4	7.6	7.7	15.2	23.5	23.6	29.5
ノールウェー	1952—54	2.0	7.2	9.1	11.1	17.1	23.3	29.8	17.2
オランダ	1952—54	2.3	4.4	4.8	6.1	9.9	18.5	31.4	
イギリス	1952—54	2.9	6.0	7.9	10.1	17.1	26.9	38.8	42.8
スウェーデン	1951—53	6.0	15.5	19.9	27.6	37.6	51.2	55.8	54.9
スイス	1952—54	16.9	32.6		30.2	42.2	62.4	72.6	85.4
(女 子)									
日本	1952—54	18.7	35.5	22.4	16.3	15.8	20.9	34.6	65.9
カナダ	1952—54	0.7	3.0	3.2	4.0	7.2	7.5	8.2	4.5
アメリカ	1951—53	1.6	2.8	4.3	5.5	7.7	8.8	8.9	7.3
オーストラリア	1952—54	8.1	16.1	11.2	15.6	21.4	23.2	23.5	26.6
ベルギー	1952—54	2.3		3.7		8.4	12.5	18.7	15.7
デンマーク	1952—54	5.9	9.1	14.6	20.3	29.1	31.4	25.4	
フランス	1952—54	2.4	3.4	3.6	4.6	8.5	14.0	16.6	16.8
イタリア	1951—53	3.3	4.4	3.4	3.6	5.4	6.6	6.8	6.8
ノールウェー	1952—54	1.0	0.7	2.8	2.5	5.6	9.1	6.9	5.5
オランダ	1952—54	0.8	1.5	2.0	3.5	5.9	11.2	14.1	
イギリス	1952—54	1.1	1.9	3.9	5.2	9.8	15.1	17.4	14.3
スウェーデン	1951—53	3.3	6.6	5.9	8.8	12.6	14.5	13.2	10.8
スイス	1952—54	6.4	10.1		11.3	13.1	19.3	22.3	19.7

自殺傾向は、年齢の加わるにつれて強くなり、それは男女の自殺に共通している、というのがワグナーやモルセリーの主張であつて、統計上の重大な法則であるとさえいつている。⁵⁾

彼らの主張は、現在もなお西欧諸国の年齢別自殺率に関するかぎり、だいたいにおいて、成り立っている。というのは、上の第3表でみると、西欧諸国の年齢別自殺率は、男女ともに、年齢の加わるにつれて、しだいに高くなつていからである。ただ70才以上の高令者の自殺率は、国によつて、低下している場合がないではない。たとえば、カナダ、ノールウェー、スウェーデンなどでは、70才以上の男子自殺率は、60—69才の男子自殺率よりもやや低くなつてい。またカナダ、アメリカ、ベルギー、ノールウェー、イギリス、スウェーデン、スイスなどでは、70才以上の女子自殺率は60—69才の女子自殺率よりも低い。老令者の自殺率が低下の傾向に転じてい理由として、モルセリーは、生理的に気力を失つていこと、宗教心の深くなることなどをあげてい。⁶⁾ が、60才以上の人口を高令者とするならば、その自殺率は、男女ともに、それよりも若い年齢層の自殺率にく

5) Wagner, A., ditto, S. 281.

Morselli, H., ibid. p. 205.

6) Morselli, H., ibid. p. 220.

らべて、いずれの国でもはなはだ高率である。高令者に自殺率の高いことは、国際的にみて、ほとんど全く例外なき事実であるといつてよい。

老令者の自殺率が低下の傾向に転じたことを問題にするよりも、高令者に自殺率の高い原因をたずねるべきであろう。

長寿に老衰の伴うことは、さけがたい生理的現象であつて、老人の運命は、総じて悲惨であるといえよう。老人は、一般に頑迷であり、食欲であり、陰険であり、温和や愛情の全くひからびた人間になり勝ちである、とアルプワックスはいつている。⁷⁾ 老人の性格がこのようなものであるとすれば、老人の余生には多くの不満あることはさけがたい。また老人は、不治の病気にかかることも多いであろうし、扶養者をもたないか、扶養者が十分に面倒をみてくれない場合には、経済的困難にさえ当面して、人生に絶望を感ずることが少なくないにちがいない。孤独と病苦と貧困になやまなければならぬ老人が、現実から逃避しようとして、しばしば絶望的な自己破壊行為をくわだてることは、もつとも有りうべきことであろう。

老令者の自殺率は、第3表でみられるように、どこの国でもいちじるしく高いが、ことに日本の老令者の自殺率は目立つて高い。戦後の新家族制度は、老人をいつそう不遇の境地に追いやつたためではあるまいかとも想像されるが、事實は必ずしもそうではないようである。というのは、後段において明らかにするように、老令者の自殺率は、戦前においても、はなはだ高いからである。旧家族制度のもとでは、老人の保護は、その家族の手にゆだねられていたが、老人の苦悩は、今日と変わりなく大きかつたにちがいない。

老令者の高い自殺率も、これを男女別にみると、男子の自殺率は、女子の自殺率にくらべて、どの国でも高いことを注目すべきである。たとえば、70才以上の自殺率は、日本では、女子の65.9にたいして男子は96.4である。オーストリアでは、女子の26.6にたいして男子は73.6である。また老人の自殺率の比較的到低いノールウェーにおいても、女子の自殺率5.5にたいして男子の自殺率は17.2である。老令者の自殺率が男女によつてこのように大きな差等のあることは、老令女子は老令男子にくらべて、より恵まれた生活環境にあるとみるべきではなく、老令女子は不幸な環境にも順応し易い忍耐力の強いこと、また自殺を決行する勇断に欠けていることに原因しているのではあるまいか。

それはともかくとして、西欧諸国の年令別自殺率にくらべて、日本の年令別自殺率は、全く異なつた傾向を示している。すなわち日本では、男女ともに、20—24才の年令層にある青年の自殺率はその前後の年令層の自殺率よりもいちじるしく高く、また70才以上の老令者の自殺率は、あらゆる年令層を通じて最高である。

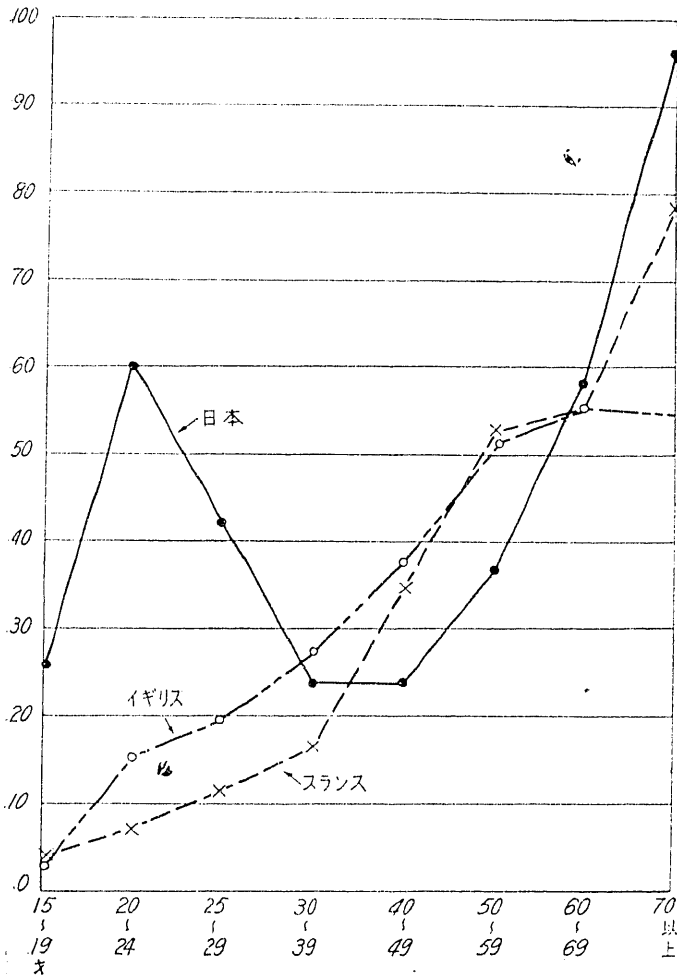
20—24才の男子自殺率は、日本では実に60.0という高率を示している。日本についてオーストリアの自殺率は27.4が高いが、それでも日本における自殺率の半分以下である。オランダやイギリスにおける20—24才の男子自殺率は、それぞれ4.4、6.0という低率であつて、日本における自殺率の $\frac{1}{10}$ 以下にすぎない。このことは、20—24才の女子自殺率についても同様の傾向がみられる。すなわち、20—24才の女子自殺率は、日本では35.5であり、これにつづくオーストリアの自殺率は16.1であつて、日本における自殺率の半分以下である。ノールウェーやオランダにおける20—24才の女子自殺率は、それぞれ0.7、1.5であるから、日本における同一年令層の女子自殺率とはくらべものにはならないほど小さい。

7) Halbwachs, M., *Morphologie sociale*, 2^e édition, 1946. p. 114.

日本における年齢別自殺率は、西欧諸国のそれにくらべて、いちじるしい差異のあることを、簡明に知るために、日本と二、三の西欧諸国の年齢別自殺率を図示すると、つぎの第2図のようである。

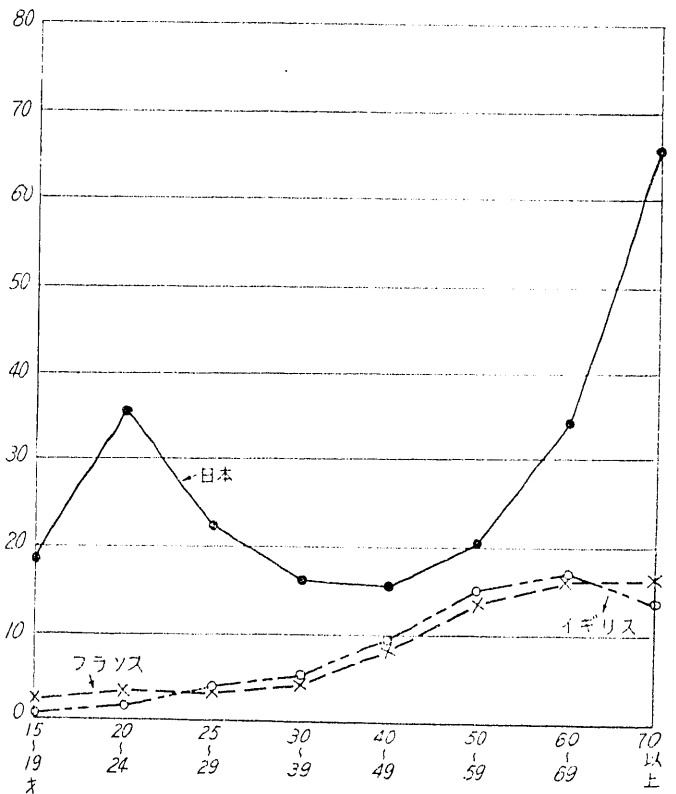
第2図 日本、フランス、イギリスの年齢別
男子自殺率 (1952—54)

(A)



第2図 日本、フランス、イギリスの年齢別
女子自殺率 (1952—54)

(B)



上の第2図で明らかなように、最も注目すべき点は、日本における20—24才の青年自殺率が、西欧諸国のそれにくらべて法外に高いことである。日本における自殺率を世界の最高水準にもち上げている最大の原因は、青年自殺率の異常に高いことである。日本では、青年自殺率は、戦前においても、はなはだ高率であつたが（このことは後段において説明する）、戦後、とくに世人の注目を引くまでに急増したのである。

青年の自殺は、戦後、なぜ急増したかについては、新聞や雑誌にいろいろの所見が発表されている。そのなかで、生命保険協会々報（昭和32年12月号）に掲載されている「自殺懇談会の概要」は、青少年の自殺問題について、自殺研究者の所見を伝えている。青少年の自殺が頻発するにいたつた原因は、彼らの見解によると、（1）学生は前途の希望を失つているばかりではなく、人生観にバックボーンがない、（2）歴史教育の足りないことも、人生観を貧弱にしている、（3）民族性の伝統、仏教的の考え方、儒教の影響を失つたこと、同時に戦後の人口問題は若い層に悲観的の

資料が多く、希望を失ったこと、にあるとしている。

この自殺懇談会では、青年の自殺対策についても討議されたのであつて、つぎのような意見が述べられている。

- (1) 道德教育と歴史教育をおこなうべきである。
- (2) 精神病の早期診断が必要である。
- (3) 人間の尊厳性を青年に深く理解させるべきである。
- (4) 自殺にたいする正しい考え方を指導したい。

青年の自殺率が、戦後、急増した原因は、これらの諸説によつて十分に説明されているであろうか。まず第1に、学生の人生観にバックボーンがないというのであるが、バックボーンのない人生観とはどういうものであるか。足なくして地上に立つというようなものであるとすれば、バックボーンのない人生観とは人生観をもつていないということになりはしまいか。そうだとすると、戦後の青年が人生観をもたないことによつて、青年の自殺率がどれほどに急増したであろうか。第2に、戦後の青年は、伝統精神を失い、仏教が儒教の影響を受けることが少なくなつたとしても、それがどうして青年の自殺率を急増させる作用をしているかについても、私は全く不案内である。第3に歴史教育が足りないといわれるが、その歴史とは日本史か東洋史か、世界史か、それとも自殺史でもあろうか。いずれの種類のものであろうとも、歴史教育が不足すると、青年の自殺率は急増するのであろうか。

つぎに、その自殺対策論をみると、第1に、道德教育と歴史教育の必要が要請されているが、歴史的知識がどうして青年の自殺を防止するのに役立つのであろうか。また道德教育が必要であるといわれるが、とくに青年に教え込む道德とはどういう種類の道德であろうか。戦後の道德水準が低下したことはおそらく事実であろうが、道德水準の低下は、青年層だけの責任に帰せらるべきものではなく、むしろ青年層は低下した道德水準のもとにおかれて、その色にそまつているとみるべきではなかろうか。そうだとすれば、青年層に向つて道德心の頽廃をせめるのは酷にすぎないであろうか。自分の目のウツバリも知らないで、他人の目のチリを取らせよという類であるまいか。社会一般の低下した道德水準を棚に上げておいて、青年層だけに道德心の高揚を期待しようとする道德教育は、あまりにも虫がよすぎはしないだろうか。

第2に、精神病の早期診断は、戦後、とくになおざりにされ、そのため精神病患者の自殺が急増しているのであろうか。もし戦後に、自殺するような精神病患者が、とくに青年のあいだに激増したというならば、大へんな問題である。第3に、人間の尊厳性を軽視する気風は、戦時中のほうがはなはだしかつたようにおもうが、もし実際はこれと反対であつて、人間の尊厳性を無視しかねない風潮が戦後の青年のあいだに多くなつたとすれば、これもまたゆゆしい問題でなければならない。

私の推測では、戦後の青年層に自殺が激増した重要な原因は、戦後における社会情勢の変化が青年を自殺に追い込み易くしたことにあるのではあるまいか。青年の人生観にバックボーンがないとか、道德性が欠けているとか、歴史的知識が乏しいとかいうことが青年の自殺増加に関係があると仮定しても、戦後の青年が自主的に自ら進んでそれを捨て去つたのではなく、捨てさせたものは、戦後の社会情勢である。それゆえに、社会情勢を改善することなくして、ただ青年層に向つてしつかりした人生観をもてとか、道德心を高めよと叫んでみたところで、罪人が罪人に説教するようなもので、なにほどの効果もないにきまつている。もし自殺が背徳であるとするならば、戦後の青年層に激増したこの背徳は、青年層が自ら好んで招いたものではなく、戦後の社会情勢である。青年層こそ社会情勢の犠牲者であつて、説教されたり、非難されたりするいわれはないであろう。

社会はなぜわれわれにこんな大きな犠牲をしいるのかと、青年が絶叫しても十分に理由あるようにおもわれる。

自殺性比を年齢別に検討した研究は、私の知るかぎり、ほとんど全くないが、年齢は、すでに述べたように、自殺傾向に大きな作用力をもっているかぎり、年齢別自殺性比にたいしても、当然に影響があるものと考えなければならない。それで、第3表にもとづいて、主要諸国の年齢別自殺性比を計算すると、つぎの第4表のようである。

第4表 主要諸国の年齢別自殺性比

国名	調査年次	15—19才	20—24才	25—29才	30—39才	40—49才	50—59才	60—69才	70 ≤
日本	1952—54	71.7	59.2	53.3	68.4	66.4	56.8	59.6	68.4
カナダ	1952—54	18.4	41.0	35.2	33.9	38.3	29.1	26.6	17.2
アメリカ	1951—53	40.1	29.5	35.2	36.7	32.4	27.2	21.0	14.2
オーストリア	1952—54	69.2	58.8	36.4	54.2	46.8	38.5	41.3	36.1
ベルギー	1952—54	41.8		35.6		35.7	34.2	37.7	21.4
デンマーク	1952—54	71.1	35.8	48.8	46.9	46.9	48.8	42.7	
フランス	1952—54	54.5	45.9	31.3	27.2	24.4	26.5	29.9	21.4
イタリア	1951—53	113.8	59.5	44.7	46.8	35.5	28.1	28.8	23.1
ノールウェー	1952—54	50.0	9.7	30.8	22.5	32.7	39.1	23.2	32.0
オランダ	1952—54	34.8	34.1	41.7	57.4	59.6	60.5	44.9	
イギリス	1952—54	37.9	31.7	49.4	51.5	57.3	56.1	44.8	33.4
スウェーデン	1951—53	55.0	42.6	29.6	21.9	33.5	28.3	23.7	19.7
スイス	1952—54	37.9	31.0		37.4	31.0	30.9	30.7	23.1

上の第4表でみると、自殺率そのものが高いか低いかという問題とは無関係に、最も若い年齢、すなわち15—19才の年齢のところ、男女の自殺率が最も接近している国が少なくない。たとえば日本、オーストリア、デンマークなどでは、男子の自殺率にたいする女子の自殺率の割合は70%前後であり、イタリアにおいては、女子の自殺率は男子の自殺率をはるかに超過している。またアメリカ、フランス、ノールウェー、スウェーデン、スイスなどでも、15—19才の自殺性比は、自余の年齢の自殺性比よりも大きい。

このような若い年齢層にある男女は、だいたい未婚者であつて、彼らを自殺に駆り立てる動機は、男女によつて大した差があるまいから、自殺性比の接近していることは、もつともありうべきことのように考えられるが、しかし、オランダやイギリスでは、自殺性比は、このような若い年齢層においてよりも、40—49才または50—59才のところ、最も高くなつている。この統計的事実は、どのように説明すればよいのであろうか。オランダやイギリスにおいて、この若い年齢層の女子は、男子にくらべて、自殺傾向がいちじるしく弱いことについては、いま、ここで説明する資料をもたないから、他日の研究にゆだねるほかない。

つぎに、70才以上の高令者の自殺性比は、日本では、15—19才の若い年齢層の自殺性比について大きい。すなわち高令女子の自殺率は、高令男子の自殺率の68.4%に達している。これにくらべると、西欧諸国における高令者の自殺性比はいちじるしく小さい。高令女子の自殺率は、高令男子の自殺率の $\frac{1}{3}$ ないし $\frac{1}{2}$ にであり、ことにアメリカの場合には $\frac{1}{6}$ 以下である。高令者の孤独、病苦、生活不安は、おそらく男女に共通した不幸な環境であろうから、日本の場合のように、自殺性比の接近してこそ常態のように考えられるが、西欧諸国の場合のように、高令女子の自殺傾向が、高令男子の自殺傾向にくらべていちじるしく弱いことは、われわれに不思議な感をいだかせる。西欧諸国の高令女子は、高令男子にくらべて、特別の社会的保護を受けているはずはあるまいから、環境にたいする順応性や生活苦にたいする忍耐力が大きいのであろうか。この問題についても、な

お検討を加える必要がある。

3. 年令別自殺率の推移

自殺率は、すでに述べたように、年令によつて、いちじるしい差異があるが、時間の経過にしたがつて、どのような推移を示しているかを明らかにするために、1920年から1955年までの年令別自殺率を示すと、つぎの第5表のようである。

上の第5表の1で見ると、1940年の自殺率は、男女ともに、すべての年令級を通じて、1935年の自殺率よりも低くなつてゐる。ことに若い年令級の自殺率はいちじるしく大幅に減退している。たとえば15—19才の男子自殺率は、1935年には25.0であるが、1940年には12.0であつて、 $\frac{1}{2}$ 以下になつてゐる。20—24才の男子自殺率は、1935年には47.8であるが、1940年には30.4に低減している。また15—19才の女子自殺率は、1935年には21.9であるが、1940年には7.6であつて、 $\frac{1}{3}$ に激減している。20—24才の女子自殺率は、1935年には31.3であるが、1940年には18.2に減退している。その他の年令級の自殺率は、これほどにはげしい減退を示していないが、男女ともに、相当に大きな減退をみせてゐる。1941年ないし1945年の年令別自殺率については、残念なことには、統計資料が欠けているために、統計的に明示することができないが、太平洋戦争中の全自殺率が激減している事実（前号13頁をみよ）から推して、戦時中の年令別自殺率は激減したにちがひあるまい。戦争は男女を問わず、またあらゆる年令級の自殺傾向を阻止する作用をなしたのである。

第2に、戦後の自殺率は、男女ともに、またあらゆる年令級を通じて、しだいに増大の傾向に転じ、ことに若い年令級の自殺率はおそるべき激増振りをみせてゐる。たとえば、15—19才の男子自殺率は、1940年には12.0であるが、1955年には37.6であつて、3倍以上も増大している。20—24才の男子自殺率は、1940年には30.4であるが、1955年には実に84.8という高率を示している。また15—19才の女子自殺率は、1940年には7.6であるが、1955年には26.4に、20—24才の女子自殺率は、1940年には18.2であるが、1955年には47.2を記録している。

その他の年令級の自殺率も、男女ともに、戦後には増加の傾向に転じてゐるが、その増加率は、若い年令級の場合にくらべると、はるかに弱い。たとえば40—44才の男子自殺率は、1940年には20.0であるが、1955年には23.6であつて、約15%の増加である。50—54才の男子自殺率は、1940年には30.9であるが、1955年には37.5である。60—69才の男子自殺率は、1940年には52.6であるが、1955年には61.3である。また40—44才の女子自殺率は、1940年には14.3であるが、1955年には14.8である。50—59才の女子自殺率は、1940年には19.8であるが、1955年には18.6で、やや低減している。60—64才の女子自殺率は、1940年には24.6であるが、1955年には35.4である。

日本における自殺率は、戦後、激増したといわれているが、もつぱら若い年令級の自殺率が著増したことに原因している。もし青少年の自殺傾向がこれほど急激に強くならなかつたならば、日本における戦後の自殺率は、大した増加を示さなかつたであらう。いま、第5表の2によつて、20—24才の自殺指数と40—44才の自殺指数を図示すると、つぎの第3図のようであつて、青年層の自殺傾向が、戦後、著増しているにたいして、中年層の自殺傾向はそれほどでないことを看取することができる。

最後に、ワグナーは、16—30才の年令級では、男子の自殺にくらべて、女子の自殺はやや多い⁸⁾といつてゐる。この立言は、日本でも大正時代の若い男女の自殺率についてはあてはまるようであ

(26頁につゞく)

8) Wagner, A., ditto. S. 23.

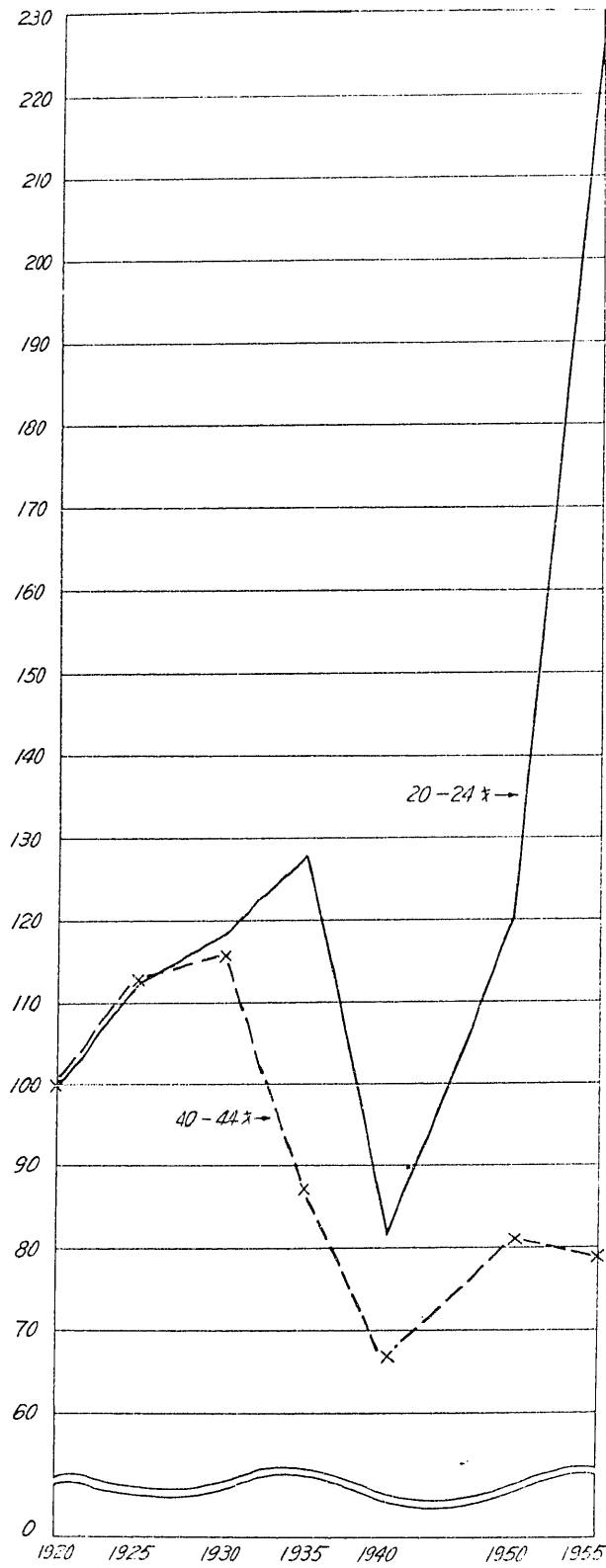
第5表の1 年齢別自殺率の推移 (1920—1955)

年齢階級	1920	1925	1930	1935	1940	1950	1955
(男 子)							
15—19才	18.1	19.2	22.0	25.0	12.0	17.5	37.6
20—24	37.4	42.1	44.3	47.8	30.4	44.9	84.8
25—29	35.8	33.0	34.6	36.3	29.5	36.0	54.9
30—34	26.1	26.9	27.4	24.8	18.7	20.3	30.3
35—39	27.9	28.7	30.0	25.8	18.8	22.4	24.3
40—44	29.9	34.0	34.9	26.1	20.0	24.3	23.6
45—49	31.9	39.6	47.6	36.6	22.8	32.5	32.3
50—54	37.6	47.6	53.2	45.4	30.9	39.7	37.5
55—59	51.7	54.8	62.6	52.7	37.9	56.1	48.1
60—69	65.3	70.8	81.4	71.4	52.6	74.9	61.3
70—79	98.0	103.5	115.9	108.2	88.6	110.5	95.3
80≦	107.6	139.1	131.2	134.9	101.3	136.7	123.0
(女 子)							
15—19才	24.0	24.8	21.4	21.9	7.6	13.0	26.4
20—24	27.0	30.3	31.3	31.3	18.2	27.8	47.2
25—29	19.5	22.8	22.3	21.0	15.4	18.8	28.0
30—34	14.8	17.9	18.3	19.7	13.6	16.1	18.0
35—39	17.1	16.2	16.7	15.6	11.4	14.5	15.9
40—44	16.2	17.9	16.5	16.7	14.3	14.4	14.8
45—49	15.8	19.0	20.2	19.1	15.0	19.0	16.7
50—54	16.7	21.2	19.1	23.0	19.8	20.2	18.6
55—59	22.2	19.5	24.0	21.7	18.2	24.1	22.7
60—69	30.2	36.4	37.6	32.9	24.6	42.6	35.4
70—79	51.6	54.2	58.0	61.8	54.0	68.1	60.3
80≦	91.2	59.2	74.1	83.4	84.2	105.7	91.8

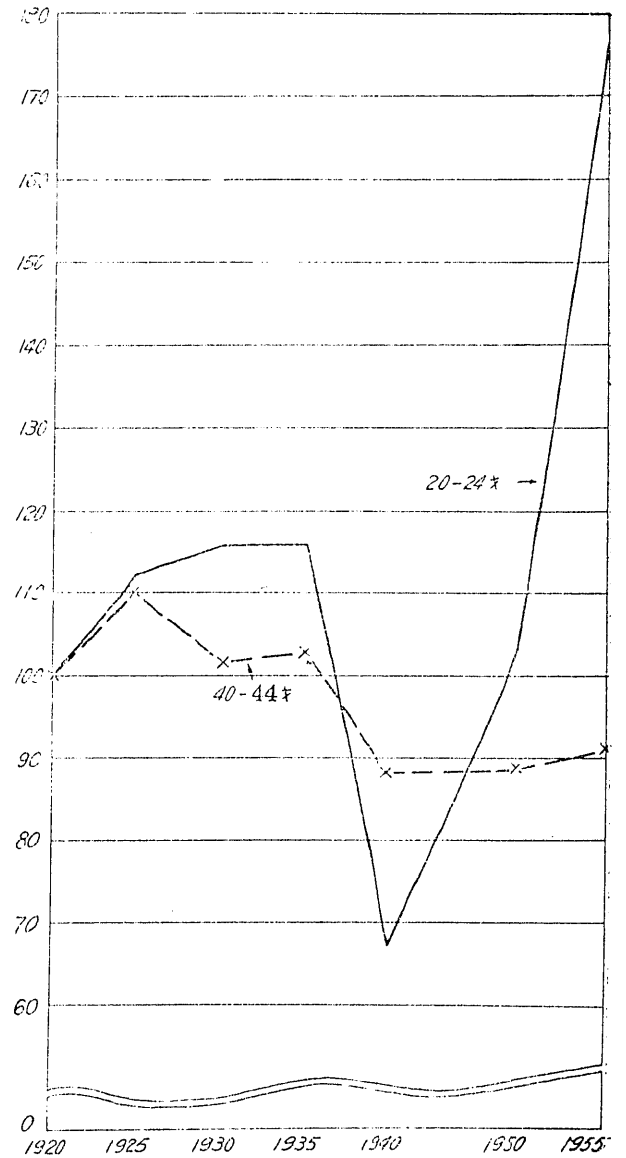
第5表の2 年齢別自殺指数

年齢階級	1920	1925	1930	1935	1940	1950	1955
(男 子)							
15—19才	100.0	106.1	121.4	138.1	66.3	96.7	207.7
20—24	100.0	112.6	118.4	127.8	81.3	120.1	226.7
25—29	100.0	92.2	96.6	101.4	82.4	100.6	153.4
30—34	100.0	103.1	105.0	95.0	71.6	77.8	116.1
35—39	100.0	102.9	107.5	92.5	67.4	80.3	87.1
40—44	100.0	113.7	116.7	87.3	66.9	81.3	78.9
45—49	100.0	124.1	149.2	147.3	71.5	101.9	101.3
50—54	100.0	126.6	141.5	120.7	82.2	105.6	99.7
55—59	100.0	106.0	121.1	101.9	73.3	108.5	93.0
60—69	100.0	108.4	124.6	109.3	80.6	114.7	93.9
70—79	100.0	105.6	118.0	110.4	90.4	112.8	97.2
80≦	100.0	129.3	121.8	125.4	94.1	127.0	114.3
(女 子)							
15—19才	100.0	103.3	89.2	91.2	31.7	54.2	110.0
20—24	100.0	112.2	115.9	115.9	67.4	103.0	174.8
25—29	100.0	116.9	114.4	107.7	79.0	96.4	143.6
30—34	100.0	120.9	123.6	133.1	91.9	108.8	121.6
35—39	100.0	94.7	97.7	91.2	66.7	84.8	93.0
40—44	100.0	110.5	101.9	103.1	88.3	88.9	91.4
45—49	100.0	120.3	127.8	120.9	94.9	120.3	105.7
50—54	100.0	126.9	114.4	137.7	118.6	121.0	111.4
55—59	100.0	87.8	108.1	97.7	82.0	108.6	102.3
60—69	100.0	120.5	124.5	108.9	81.5	141.1	117.2
70—79	100.0	105.0	112.4	119.8	104.7	132.0	116.9
80≦	100.0	64.9	81.2	91.4	92.3	115.9	100.7

第3図の1 20—24才と40—44才の男子自殺指数



第3図の2 20—24才と40—44才の女子自殺指数



附表第1 主要国の男女別

年次	イギリス			イタリア			フランス			スイス			オ
	男子自殺率	女子自殺率	男子自殺率にたいする女子自殺率%	男子自殺率	女子自殺率	男子自殺率にたいする女子自殺率%	男子自殺率	女子自殺率	男子自殺率にたいする女子自殺率%	男子自殺率	女子自殺率	男子自殺率にたいする女子自殺率%	
1901	14.7	4.8	32.7	9.9	2.6	26.2	—	—	—	37.5	7.8	20.8	8.8
1902	15.4	4.7	30.5	9.7	2.6	26.8	—	—	—	38.6	7.4	19.2	9.3
1903	16.4	5.1	31.1	9.4	2.3	24.5	—	—	—	38.6	7.5	19.4	10.6
1904	15.5	4.7	30.3	10.4	2.7	26.0	—	—	—	41.8	7.8	18.7	10.6
1905	16.3	4.9	30.1	11.4	3.0	26.3	—	—	—	37.7	7.8	20.7	11.6
1906	16.0	4.5	28.1	10.7	3.3	30.8	—	—	—	34.2	7.5	21.9	10.1
1907	15.7	5.0	31.8	11.0	3.7	33.6	—	—	—	39.0	7.5	19.2	10.5
1908	16.8	5.2	31.0	12.5	3.6	28.8	—	—	—	36.7	8.8	24.0	10.7
1909	15.7	4.9	31.2	13.6	4.0	29.4	—	—	—	36.4	9.3	25.5	11.0
1910	15.5	4.8	31.0	13.0	3.9	30.0	—	—	—	38.5	7.4	19.2	9.1
1911	15.2	5.0	32.9	11.4	4.6	40.4	—	—	—	38.5	9.4	24.4	9.2
1912	15.4	4.8	31.3	12.6	4.6	36.5	—	—	—	38.9	8.2	12.1	9.3
1913	14.7	4.9	33.3	13.1	4.6	35.1	—	—	—	41.7	8.3	19.9	10.8
1914	15.7	4.8	30.6	13.0	4.9	37.7	—	—	—	38.3	11.0	28.7	9.3
1915	11.3	4.8	42.5	12.8	4.4	34.4	—	—	—	35.2	8.8	25.0	8.8
1916	11.5	4.1	35.7	10.0	3.9	39.0	—	—	—	31.9	9.7	30.4	8.0
1917	9.7	3.9	40.2	10.0	3.8	38.0	—	—	—	29.6	7.3	24.7	8.9
1918	11.1	4.7	42.3	10.7	4.3	40.2	—	—	—	30.5	9.6	31.5	9.7
1919	13.6	5.1	37.5	10.5	4.2	40.0	—	—	—	30.1	11.6	38.5	10.6
1920	13.4	5.1	38.1	10.3	4.5	43.7	—	—	—	35.0	11.1	31.7	10.8
1921	15.3	5.0	32.7	11.6	4.2	36.2	—	—	—	37.0	9.6	25.9	9.3
1922	15.4	5.3	34.4	12.4	4.3	34.7	—	—	—	38.9	9.9	25.4	9.8
1923	15.7	5.3	33.8	13.1	4.5	34.4	—	—	—	38.6	9.5	24.6	8.7
1924	14.2	5.4	38.0	14.6	5.1	34.9	—	—	—	38.5	9.8	25.5	9.2
1925	15.3	6.1	39.9	14.0	4.9	35.0	30.4	8.9	29.3	35.6	9.1	25.6	9.1
1926	16.6	6.6	39.8	15.1	4.7	31.1	29.7	9.4	31.3	41.8	11.6	27.7	10.1
1927	18.4	7.1	38.6	16.3	5.1	31.3	29.9	9.4	31.4	39.8	10.4	26.1	10.3
1928	18.0	7.2	40.0	14.7	4.9	33.3	29.2	9.2	31.5	41.2	11.2	27.2	10.1
1929	18.4	7.3	39.7	13.4	4.7	35.1	28.8	8.6	37.7	38.5	11.4	29.6	9.8
1930	18.5	7.4	40.0	14.7	4.7	32.0	29.8	9.0	30.2	40.8	12.4	30.2	12.1
1931	18.9	7.3	38.6	15.6	4.7	30.1	29.8	8.9	29.9	39.1	11.4	29.2	11.6
1932	21.0	8.1	38.6	14.9	4.8	32.2	32.7	9.4	28.7	46.5	14.1	30.3	12.8
1933	20.1	8.4	41.8	13.7	4.3	31.4	31.6	9.2	29.1	42.6	13.1	30.7	11.7
1934	19.8	8.1	40.9	13.1	4.5	34.4	34.5	9.3	27.0	42.8	11.3	26.4	12.0
1935	18.1	8.0	44.2	11.5	4.1	36.7	32.1	8.9	27.7	42.5	11.3	26.6	11.2
1936	17.6	7.7	43.8	12.1	4.0	33.1	31.0	8.9	28.7	44.3	12.4	28.0	10.9
1937	17.5	8.1	46.3	11.5	3.9	33.9	—	—	—	38.3	10.5	27.4	10.5
1938	18.0	8.2	45.6	11.0	3.6	32.7	—	—	—	38.4	11.6	30.2	11.6
1939	16.6	7.8	47.0	10.4	3.6	34.6	—	—	—	38.4	10.2	26.6	10.7
1940	15.9	7.5	47.2	8.9	3.1	34.8	28.4	10.3	36.3	36.8	11.2	30.4	13.9
1941	13.5	6.2	45.9	7.9	2.8	35.4	26.4	9.3	35.2	37.4	12.2	32.6	7.8
1942	12.5	6.2	49.6	7.8	2.7	34.6	18.9	7.6	40.2	34.4	12.8	37.2	9.6
1943	13.4	6.3	47.0	7.7	2.4	31.2	17.5	7.2	41.1	35.9	12.5	34.8	9.5
1944	13.5	5.8	43.0	6.0	2.0	33.3	18.2	6.1	33.5	37.2	14.7	39.5	7.4
1945	13.6	6.6	48.5	6.9	2.7	39.1	19.3	6.3	32.6	39.1	17.3	44.3	12.7
1946	14.4	7.5	52.1	7.8	3.0	38.5	16.4	6.5	39.6	37.4	15.4	41.2	10.0
1947	13.7	7.6	55.5	8.8	3.0	34.1	19.3	6.6	34.2	37.0	14.3	38.6	9.0
1948	14.5	7.9	54.5	9.3	3.4	36.6	22.0	7.0	31.8	35.1	11.0	31.3	8.6
1949	14.7	7.5	51.0	9.8	3.6	36.7	23.4	7.6	32.5	35.7	12.6	35.3	8.3
1950	13.5	7.0	51.9	9.5	3.6	37.9	23.8	7.2	30.3	34.8	12.9	37.1	7.4
1951	13.4	7.2	53.7	10.3	3.5	34.0	24.0	7.6	31.7	30.9	11.8	38.2	7.9
1952	13.2	6.8	51.5	9.3	3.6	38.7	24.0	7.4	30.8	32.0	11.5	35.9	8.2
1953	14.2	7.6	53.5	9.2	3.9	42.4	24.0	7.2	30.0	34.1	10.1	29.6	8.5
1954	14.9	8.1	54.4	—	—	—	24.7	7.4	30.0	33.9	12.0	35.4	8.2
1955	—	—	—	—	—	—	—	—	—	31.4	12.4	39.5	7.5

自殺率と自殺性比

ラ ン ダ		ス エーデン			ノールウエー			アメリカ			カナダ		
女子自殺率	男子自殺率にたいする女子自殺率%	男子自殺率	女子自殺率	男子自殺率にたいする女子自殺率%	男子自殺率	女子自殺率	男子自殺率にたいする女子自殺率%	男子自殺率	女子自殺率	男子自殺率にたいする女子自殺率%	男子自殺率	女子自殺率	男子自殺率にたいする女子自殺率%
2.9	32.9	22.5	4.2	18.7	9.6	1.5	15.6	15.5	5.3	34.2	—	—	—
2.8	30.1	25.3	5.0	19.8	8.9	2.1	23.6	15.4	5.2	33.8	—	—	—
2.4	22.6	22.4	4.8	21.4	9.7	1.9	19.6	17.2	5.4	31.4	—	—	—
3.1	29.2	22.7	5.8	25.6	10.2	1.5	14.7	18.5	6.0	32.4	—	—	—
2.8	24.1	26.2	4.8	18.3	7.4	2.8	37.8	20.2	6.8	33.7	—	—	—
3.2	31.7	24.0	5.5	22.9	6.4	1.6	25.0	19.6	5.8	29.6	—	—	—
3.1	29.5	26.6	5.0	18.8	8.8	1.8	20.5	21.9	6.9	31.5	—	—	—
3.2	29.9	25.6	6.1	23.8	8.0	1.8	22.5	25.5	7.8	30.6	—	—	—
3.3	33.0	28.5	5.6	19.6	7.9	2.2	27.8	24.2	7.3	30.2	—	—	—
3.4	37.4	29.3	6.9	23.5	8.8	2.3	26.1	23.0	7.2	31.3	—	—	—
3.3	35.9	29.2	6.5	22.3	8.0	1.8	22.5	23.9	7.5	31.4	—	—	—
2.7	29.0	30.6	6.4	20.9	10.1	2.2	21.8	23.4	7.3	31.2	—	—	—
2.8	25.9	29.8	6.5	21.8	10.1	1.9	18.8	23.2	7.1	30.6	—	—	—
2.8	30.1	26.3	5.9	22.4	8.5	1.5	17.6	24.1	7.7	32.0	—	—	—
3.4	38.6	24.8	6.4	25.8	9.3	1.5	16.1	24.3	7.6	31.3	—	—	—
3.3	41.3	20.9	5.8	27.8	6.2	1.6	25.8	20.7	6.4	30.9	—	—	—
3.4	38.2	15.7	4.8	30.6	5.7	1.6	28.1	19.2	6.6	34.4	—	—	—
4.3	44.3	15.2	5.0	32.9	5.0	1.4	28.0	18.2	6.2	34.1	—	—	—
4.2	39.6	21.6	5.7	26.1	8.0	1.7	21.3	16.5	6.3	38.2	—	—	—
3.8	35.2	23.7	6.1	25.7	7.6	2.1	27.6	14.5	5.7	39.3	—	—	—
3.4	36.6	24.8	6.3	25.4	9.3	2.4	25.8	18.9	5.7	30.2	10.2	2.9	28.4
2.6	26.5	23.5	5.7	24.3	9.5	1.8	18.9	17.6	5.7	32.4	11.1	3.6	32.4
3.2	36.8	23.4	5.3	22.6	10.1	2.4	23.8	17.0	5.8	34.1	11.9	4.3	36.1
3.2	34.8	23.8	5.5	23.1	9.8	2.0	20.4	18.1	5.6	30.9	11.6	4.3	37.1
3.2	35.2	21.8	5.6	25.7	8.7	2.2	25.3	18.0	5.8	32.2	13.4	3.7	27.6
3.9	38.6	24.7	5.2	21.1	10.5	1.7	16.2	18.8	6.2	33.0	11.3	3.0	26.5
5.0	48.5	24.6	6.0	24.4	9.6	1.8	18.7	19.9	6.2	31.2	12.4	3.1	25.0
4.5	44.6	23.5	4.9	20.9	10.6	2.8	26.4	20.7	6.2	29.9	11.8	3.3	28.0
4.4	44.9	25.3	5.9	23.3	10.7	2.7	25.2	21.1	6.6	31.3	12.6	3.8	30.2
6.0	49.6	25.8	6.2	24.1	12.5	2.2	17.6	24.1	6.9	28.6	15.3	4.2	27.5
5.3	45.7	26.5	6.8	25.7	11.4	2.6	22.8	26.2	7.1	27.1	14.8	4.2	28.4
5.0	39.1	29.9	5.9	19.7	10.7	2.5	23.4	27.4	7.1	25.9	14.9	4.2	28.2
4.7	40.2	27.8	6.7	24.1	10.7	1.9	17.8	24.9	6.8	27.3	13.3	3.7	27.8
4.8	40.0	25.3	5.6	22.1	10.9	3.0	27.5	22.8	6.8	29.8	13.1	3.9	29.8
4.8	42.9	24.9	6.4	25.7	9.9	3.1	31.3	21.7	6.8	31.3	12.8	3.7	28.9
5.4	49.5	26.7	7.0	26.2	9.6	3.0	31.2	21.7	6.8	31.3	12.5	4.2	33.6
5.5	52.4	24.1	7.3	30.3	10.3	3.4	33.0	22.8	7.0	30.7	13.2	4.3	32.6
5.4	46.6	25.0	6.8	27.2	10.7	3.3	30.8	23.5	6.9	29.4	13.1	3.7	28.2
4.9	45.8	25.5	7.0	27.5	11.1	2.5	22.5	21.7	6.5	30.0	13.2	3.9	29.5
7.6	54.7	27.2	7.1	26.1	11.4	2.5	21.9	21.9	6.8	31.1	12.2	4.3	35.2
5.1	65.4	24.7	7.0	28.3	6.9	1.6	23.2	19.4	6.3	32.5	11.3	4.1	36.3
8.5	88.5	21.8	6.9	31.7	7.8	2.2	28.2	18.3	5.8	31.7	10.4	3.8	36.5
6.8	71.6	22.3	8.1	36.3	8.7	2.9	33.3	15.2	5.4	35.5	9.0	3.7	41.1
5.6	75.7	20.6	5.7	27.7	8.2	3.1	37.8	14.9	5.4	36.2	8.9	3.2	36.0
6.2	48.8	23.1	7.7	33.3	14.7	3.9	26.5	17.2	5.8	33.7	9.2	3.4	37.0
5.6	56.0	23.2	7.9	34.1	10.9	1.5	13.8	17.4	5.8	33.3	12.1	4.1	33.9
4.2	46.7	22.7	7.0	30.8	10.1	3.1	30.7	17.6	5.5	30.7	11.1	3.9	35.1
4.5	52.3	22.6	6.5	28.8	11.4	2.6	22.8	17.2	8.8	51.2	11.8	3.7	31.4
4.1	49.4	23.5	9.1	38.7	10.0	3.4	34.0	17.9	5.1	28.5	12.0	3.1	25.8
3.7	50.0	22.8	6.9	30.3	12.4	2.6	21.0	17.8	5.1	28.6	11.9	3.5	29.4
4.1	51.9	24.9	7.5	30.1	10.2	2.8	27.5	16.2	4.7	29.0	11.1	3.6	32.4
4.4	53.7	26.3	7.2	27.4	10.3	3.5	34.0	15.8	4.4	27.8	11.1	3.4	30.6
4.6	54.1	28.2	9.0	31.9	11.0	4.3	39.1	16.1	4.3	26.1	11.0	3.2	29.1
4.3	52.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10.9	3.5	32.1
4.6	61.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

附表第2 府県別にみた男女自殺率(1900—1955)

都道府県	1900		1910		1920		1930		1940		1950		1955	
	男子自殺率	女子自殺率	男子自殺率	女子自殺率	男子自殺率	女子自殺率	男子自殺率	女子自殺率	男子自殺率	女子自殺率	男子自殺率	女子自殺率	男子自殺率	女子自殺率
1 北海道	15.4	7.6	16.2	11.1	19.7	12.1	24.5	14.4	14.1	9.8	18.3	9.7	25.2	16.5
2 青森	12.2	3.0	15.5	7.4	15.2	7.2	18.6	8.7	12.2	7.1	17.2	7.1	26.4	10.5
3 岩手	20.3	8.2	29.8	13.8	23.0	12.0	25.3	18.4	16.6	10.0	21.5	14.8	32.0	19.2
4 富山	14.8	5.3	20.4	9.5	15.7	8.8	20.2	10.2	9.0	8.2	13.5	9.9	17.2	11.4
5 秋田	9.1	4.5	19.0	9.8	19.0	9.9	30.1	16.4	18.2	12.7	22.6	12.7	24.7	15.8
6 山形	20.2	13.4	27.2	12.5	30.1	18.8	28.6	15.3	21.1	12.4	20.6	14.5	26.7	17.6
7 福島	13.7	8.9	22.3	11.5	22.0	11.5	24.0	12.7	10.4	10.8	16.4	10.1	23.1	15.5
8 茨城	12.9	7.4	15.0	10.6	15.9	10.5	18.7	12.2	13.1	8.9	14.2	10.1	21.2	13.2
9 栃木	15.7	7.8	29.8	13.9	27.4	12.8	32.5	15.7	17.9	11.1	17.0	16.0	23.2	15.2
10 群馬	24.8	13.9	33.7	16.1	30.9	17.8	33.2	20.5	20.2	12.4	21.6	16.3	29.7	20.8
11 埼玉	20.0	11.8	29.9	17.6	31.3	20.9	32.1	19.0	20.5	14.8	24.2	16.6	26.4	18.0
12 千代田	14.7	7.3	18.1	11.2	23.9	16.2	30.3	16.1	19.8	10.3	21.0	14.4	25.0	18.4
13 東京	21.0	12.3	22.7	13.5	18.5	15.5	21.0	15.1	13.6	9.2	25.1	16.1	32.3	21.1
14 神奈川	18.1	8.9	27.8	13.9	27.8	19.3	35.9	16.8	16.3	12.2	23.3	13.3	30.1	17.3
15 新潟	23.0	16.4	29.1	17.9	32.6	18.3	37.4	18.0	24.2	16.8	27.1	20.6	32.9	22.0
16 富山	8.6	5.1	16.4	5.6	20.0	11.4	26.7	13.3	15.9	10.9	26.4	15.0	35.4	20.1
17 石川	12.6	6.4	15.9	8.1	19.2	13.1	25.5	12.1	19.3	10.9	25.2	11.7	29.5	15.8
18 福井	19.2	8.7	27.1	12.2	21.1	18.0	32.5	16.3	24.4	13.6	25.8	18.3	35.4	19.4
19 山梨	18.5	8.7	20.7	17.5	19.3	15.4	29.5	18.7	19.6	11.0	21.9	17.0	29.2	18.0
20 長野	17.5	12.9	28.6	19.6	30.7	15.8	34.6	25.0	18.2	17.3	26.0	19.1	28.1	22.4
21 岐阜	20.9	13.6	29.8	25.2	29.8	22.3	34.5	27.6	25.9	19.9	27.4	20.5	34.1	21.0
22 静岡	16.8	11.5	23.6	16.0	22.3	14.3	27.9	16.2	17.4	11.4	22.0	13.9	29.1	16.0
23 愛知	14.2	10.6	28.1	18.7	27.0	16.5	29.3	19.4	15.8	10.0	26.0	19.6	29.5	22.9
24 三重	14.7	6.9	20.3	14.5	25.1	18.6	25.9	16.5	16.7	11.7	28.4	15.1	27.7	21.1
25 滋賀	25.3	12.7	32.0	21.1	40.5	22.8	39.2	20.3	28.9	21.5	27.1	20.1	28.8	21.7
26 京都	23.1	11.9	32.3	21.0	32.7	25.8	33.7	21.2	20.9	14.2	30.6	19.1	29.7	20.7
27 大阪	20.6	12.0	25.6	16.7	22.2	14.2	25.5	16.5	11.6	9.2	24.4	14.3	34.6	23.1
28 兵庫	18.5	10.1	27.5	15.7	22.7	15.9	30.4	17.5	15.4	9.3	25.9	18.0	35.7	21.7
29 奈良	19.0	8.3	29.3	15.2	32.8	23.2	34.2	19.9	24.1	14.3	27.7	17.2	37.6	20.8
30 和歌山	17.4	13.8	32.3	15.3	28.5	22.2	31.1	20.9	26.2	15.3	28.2	26.2	42.5	29.8
31 鳥取	16.9	7.7	18.1	8.2	18.9	12.9	24.3	11.2	18.1	9.6	16.6	10.0	29.1	19.6
32 島根	13.2	10.2	23.3	15.4	22.0	14.2	33.6	17.8	22.9	11.3	20.0	17.7	32.5	17.4
33 岡山	20.4	12.9	27.0	19.8	26.6	18.6	27.7	16.7	21.3	14.9	18.3	16.2	29.2	17.5
34 広島	14.0	10.0	24.5	13.6	27.4	16.2	30.1	16.6	20.0	13.0	25.1	14.4	33.9	15.3
35 山形	18.3	13.0	26.0	16.1	29.4	18.3	34.1	20.6	21.7	12.0	26.6	16.9	33.8	22.0
36 徳島	13.3	16.5	23.6	16.8	24.1	16.3	24.1	17.8	18.4	9.3	17.3	17.1	27.2	22.6
37 香川	11.2	7.5	19.3	11.9	22.3	11.1	24.7	21.4	19.2	11.3	22.5	17.6	31.7	27.8
38 愛媛	16.7	10.1	23.1	17.6	23.7	16.0	28.7	16.5	19.9	9.9	22.0	13.1	30.9	15.7
39 高松	16.3	6.0	22.3	9.4	22.6	14.2	24.4	15.2	19.0	11.7	22.8	14.7	29.6	15.4
40 福岡	12.2	5.5	17.3	8.9	19.6	10.7	22.6	12.2	15.1	8.0	21.9	13.1	34.6	15.6
41 佐賀	11.0	4.2	17.3	10.5	18.2	7.6	17.5	9.3	7.2	8.9	17.6	11.9	38.6	21.9
42 長門	12.6	8.3	16.6	7.4	17.8	8.3	20.3	8.6	12.0	8.0	16.3	8.9	28.2	13.3
43 熊本	14.4	9.1	19.0	10.5	15.9	8.9	24.1	11.2	14.6	8.3	17.6	10.7	28.2	11.7
44 大分	12.5	7.2	16.6	8.5	17.7	13.0	23.6	15.0	16.4	12.2	22.8	17.3	26.8	13.5
45 宮崎	12.6	7.8	22.0	7.4	12.9	9.6	25.3	10.6	12.5	7.1	22.1	8.8	27.9	15.9
46 鹿児島	10.3	5.3	14.5	4.9	17.4	6.5	22.2	10.0	15.9	7.2	18.4	9.2	22.7	14.2

(21頁よりつゞき)

る。というのは、1920年および1925年には、15—19才の自殺率は、男子にくらべて女子のほうが高いからである。すなわち1920年には、15—19才の自殺率は、男子の18.1にたいして女子では24.0であり、また1925年には、15—19才の自殺率は、男子の19.2にたいして、女子では24.8を示している。しかし、これは例外的な現象であつて、その後の年次においては、15—19才の自殺率は、これと反対に女子にくらべて男子のほうが常に高い。またその他の年齢級では、全く一つの例外もなく、男子の自殺率は常に女子の自殺率よりも高くなつてゐる。